

# 小田原史談

第 142 号

発行所 小田原史談会  
小田原市栄町2-13-20

## 今は幻の小田原競馬

人馬一体の懸命な疾走、走路は勾配がかつたカーブにさしかかっている。前面で勝敗の行途を固唾をのんで見守る観客。手前は馬券なしで見られる場所なのか子供の姿も見える。

遠方には、曾我丘陵と酒匂川流域とその村むら。川沿いに点々としているのは堤防の松であろう。川尻左手のこんもりした箇所は、酒匂の松林と思われる。さらに右手にある森は、山王川の川尻のようだ。

かつての競馬場はいま、すっかり住宅地になってしま、当時、足柄村谷津という地名も、小田原市城山二丁目と改まり、昔の名残りは僅かに遙か遠景に留めるだけになっている。

※

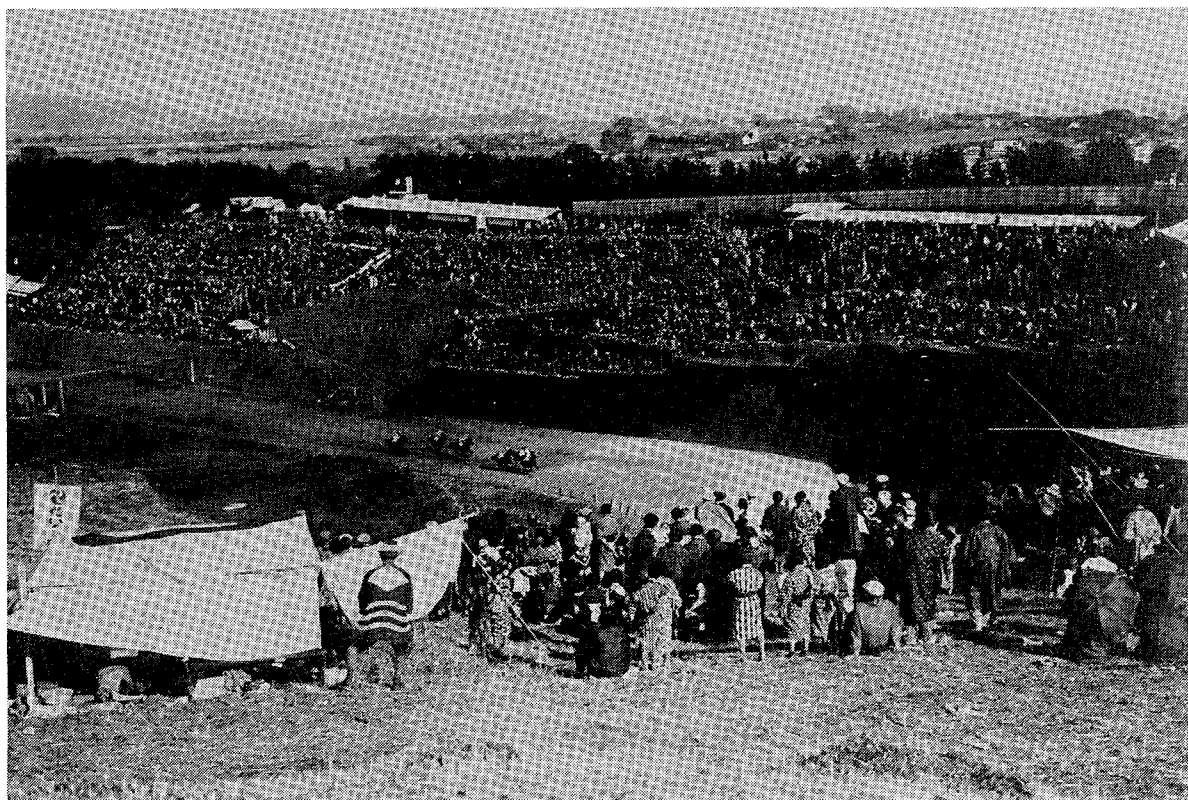
足柄下郡の競馬場は一カ所と、規則で定められた。しかしその位置は、荻津とすんなり決まった訳ではなかった。小田原町と国府津町との間で激しい誘致運動が繰りひろげられた。それは小田原競馬が開催される前年の大正十三年の事である。

結果、競馬場設置場所の決定は、足柄下郡畜産組合代議員会で決定されることになったのである。そうすると小田原と国府津とが、互に水面下で代議員の奪い合いをすることもあった。

競馬場を小田原に持つてくることで、蔭で非常に苦労したのは尾崎亮司で、尾崎には関東大地震で壊滅的打撃を受けた小田原復興のためという思いが先立っていた。尾崎は競馬場造りのため、かなりの身代を減らしている。当時、小田原町の財政は乏しく競馬場建設に投資するゆとりなどなかった。啓蒙学校(今の本町小学校)で尾崎と同級生の相澤富次郎(相澤栄一氏の父上)も協力しているが、やはり何等報いられることはなかった。

なお、この写真がいつ撮られたものかはっきりしない。ただ、小田原競馬が開かれたのは、大正十四年から昭和五年頃迄で、その五、六年の間であると、大まかにしかいえない。

(西野 明)



写真所蔵

相澤栄一氏

# 小田原叢談(二)

## 石井富之助

### 道中記が語る海の名勝

江戸時代の紀行文・道中記によれば、現在の小田原市の中で海岸の景色のよい所が三か所あったという。前川と国府津の間、酒匂から山王へかけての海、それとお塔坂から早川を前にして眺める海の景色である。文政七年(一八二五)に下田奉行小笠原加賀守長保の書いた『甲申旅日記』というのがある。長保はこの中で、

前川村と国府津の間は、相模伊豆の遠近の山が濃くうすく、くまどつたように海越しに見渡せて、絵をかき人に見せたいほどである。

また、お塔坂では

早川の水は三瀬に流れ、しかも石のゴロゴロした、まことに早い川である。流れと流れの間のごかしこに畑がある。はるかな流れは山

のふもとをめぐり、この三瀬の流れはともにすぐ海にいたるのである。大海も見えてそのながめはまことに趣深いものがあつた。といっている。山王あたりの海については、雲州亭橋才が『東雲堂』(一八三〇刊)におもしろいことを書いています。袖が浦は一名星月夜の浦ともいう。酒匂の川が海に入る所で、やみ夜にそこへ行ってみると、打ち寄せる波が砂の上を走り、ちようど星が走っているように見えるのはめずらしい景色だといへるだろう。この辺の砂浜は非常に広くて、また特別の味わいのある所だが、今土地の人に星月夜の浦という名を聞いてもだれも知らない。

この三か所はだれでも美しいながめだともめていたらしいが、だいたい小田原の海岸線はどこでも景色がよかつたようである。というのは、嘉永六年(一八三三)『御林書抜帳』という写本をみると、山王から大磯までの浜の手はずつと松林続きで、それにそつて東海道が通つており、松原越しにひろびろとした相模なだ、伊豆半島から初島、大島まで手にとるようにながめられたからである。そこへ行くと、お塔坂の方は早川があるからまた別の趣がある。家続きの小田原宿から板橋を出はざると、もう箱根山の入口だといっているように、お塔坂は今よりはずっと高い坂で、その上のところに象が鼻という大きな岩があつた。ここからは早川を目の下に、晴れた日にははるかに房総の山々を望むことができた。

文永十一年(一一三三)日蓮上人が鎌倉から身延山へ行く途中、五月十三日にここに至つた。山の崖に象が鼻という大きな岩があつたが、その岩の上に登つてはるかに房総の山々を望み、故郷

のことをしのび、両親を回向する経文をよみ、衆上の利益のため、病氣消滅した本尊を書いてそばの松の樹にかけて祈願した。またここに石の宝塔を建てて、首題多宝四菩薩を刻んだ。これから後、里人はこの地を御塔と呼んだという伝説がある。

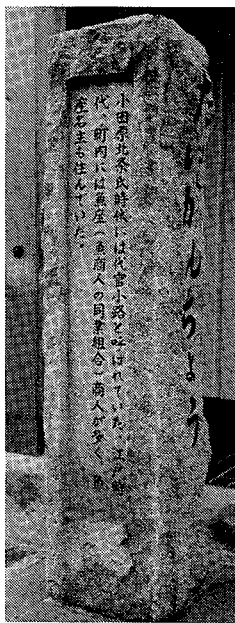
それが今では国道にはほとんど隙間もなく家が立ちならび、海岸線の砂浜には西湘バイパスが走っている。便利になつたには違ひない。

### 町名の移り変り

旧小田原町の町名は旧町名と新町名(緑、新玉、万年、幸、十字)と住居表示による町名というように順々に変つていく。旧町名はおおよそ百を数えるほどの名が残っているが、『新編相模国風土記稿』には

い。マイカー族にとつては道路も眺望も快適であるかも知れない。しかし、広重の絵に見られるような美しさは失われてしまった。板橋、風祭には何本もの道路のインターチェンジが集中して、縦横に錯そうしている。それがメカニックな近代的風景を作り出していることは事実だが、さてむかしの景色と今の風景とを比べて、果たしてどちらが美しいといえることやら。

城下町 城の東南を擁しておおよそ十九町ある。そのうち新宿町、万町、高梨町、宮前町、本町、中宿町、欄干橋町、筋違橋町、山角町の九町は通町という。茶畑町、



代官町、千度小路、古新宿町の四町は通町の南裏にあり、青物町、一町田町、台宿町、大工町、須藤町、竹花町の六町は甲州街道にっらなっている。この十九町をすべて小田原宿と称する。この外、谷津村という村落がある。農民の住んでいる所で、宿駅のことには関係しない。十九町一村をすべて小田原府内と称した。とあり、これ以外の侍屋敷の名としては、唐人町、安小路、厩小路、大久寺小路、手代町、三軒屋、八段畑、花の木、洗取、大新馬場、中新馬場、幸田、揚土、新感屋敷、鍋釣小路、金屋小路と十六の名前をあげているにすぎない。

このほかに御用所、隅屋敷、新道、宮小路、西海子、誓願、柳、抹香町、林角、広小路など、まだまだいくつもあるが、正式にこれらの名を記載したものはない。全部が侍屋敷で、名がなくて困るから通称としてつけられていたのであろう。この中にはあるいは明治になってからつけられた名もあるかも知れない。

ともかくこれが旧町名であるが、明治八年(一八七五)に行政区画の改革によって五つの町名に統一された。すなわち、緑町、新玉町、万年町、幸町、十字町の五町で、それぞれ一丁目から四丁目までとなっていた。どうしてこういう名がつけられたかいろいろ説があるが、どれも推測にすぎない。

それ以来約九十年の間、わたしたちはこの新旧町名を併用の形で使ってきたが、昭和四十一年四月一日に至り、居住表示による新町名(栄町、城内、本町、南町、浜町、中町(中島、町田を含む))が施行された。九十年という長い歳月を経ると、都市の発展に伴って人口ならびに戸数は増加し、道路の新設などもあって街区は複雑になり、だれがどこに住んでいるかさえもわからなくなってしまう。

このことは小田原だけでなく全国どこの都市でも同様で、これでは行政上多大の支障をきたすことにもなる。街の区画を再編成し、住居を明確にする必要があるというのが自治省のねらいであった。

その自治省の指示に従って小田原にも委員会が設けられ審議が始まったが、町名変更についてはわたしにいささかの疑義があった。住居を明確にすることは結構だが、そのためになぜ町名まで変えなければならぬのか。住居表示が目的ならば町名は変えず、従来の番地の代りに住居番号を与えれば、それで事足りるのではないかというのがわたしの意見であった。わたしはこの意見を具申しておいた。しかし、委員でもないもの意見などとり入れられるはずもなかった。

おかげで市役所、警察、郵便局その他の官公署は大いに便利になったが、市民はまた一つ町名が増えたという感じで、余計にわからなくなってしまう。その上、従来の町名は道路を中心につけられていたのに、こんどの町名は道路に囲ま

れた区画につけられている。これだと道路の向い側とこちら側の町名がちがうというところもあって商業活動に支障をきたす場合も出てくる。それでは困るということで商店街はそれぞれ何々通り商店街という名称を使いはじめた。これでまた名前が一つふえた勘定になる。まったくもっていやはやである。

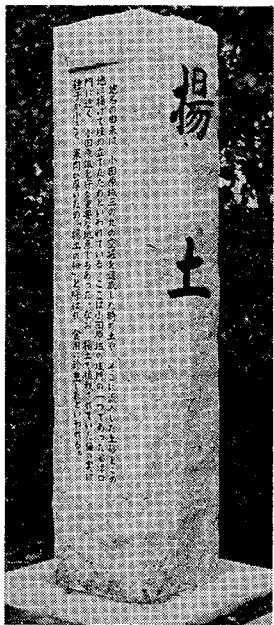
新しい町名が施行されてからもう十年以上になる。それなのに小田原のバスの停留所の名前は旧町名、新町名、住居表示による町名が入り乱れて使われている。もっとおかしなのは市と最も緊密な関係にある自治会の各地区会長は、緑、万年、新玉、十字、幸というものはどこにも存在しない地区から選出されているのである。自治会には自治会の事情があつてにわかに改

めることはできないのかも知れないが、よくよく考えるとまことに不思議千万である。

ともかくこういういろいろと町名があつてはかなわない。せつかく大きな犠牲を拂って住居表示による町名をきめたのだから、何とかその方向へ持って行くような方策がとられてもいいように思うのだが、これこれのことをやりましたという話はまだ聞いていない。

なにしろ、本町、宮の前、竹の花などという旧町名が百年経った現在でも生きているのだから、そうおいそれと住居表示による町名がとって代れるはずはない。どうやら、旧町名をいまだに使っている老人たちが、この世から姿を消したあかつきには何とかなるであろうというところらしい。

(続)



# 小田原の浮世絵 (二)

岩崎宗純

## (2) 新発見の北斎作品

前号でぼう大な浮世絵作品のなから、小田原の浮世絵を探し出す困難さに触れ、小田原浮世絵目録の完成は当分不可能であろうと記しました。まだまだ未紹介の小田原浮世絵が出てくる可能性は充分あるのです。

案の定、最近刊行された『北斎美術館?・風景画』(集英社)には、未紹介の北斎の東海道続絵が紹介され、その中に「小田原」がありました。前号で北斎の小田原作品は五点であると紹介したばかりなので、少し恥かしい気もしますが、同書によりこの作品に触れておきたいと思います。

新発見の北斎の東海道続絵は、小版横絵の五十五枚揃で、落款は全て画狂人北斎画とあり、様式上から見て、享和末年から文化初年の頃の作品と見なされています。

残念ながら図版での紹介はできませんが、「小田原」は「うめろう」と書いた衡立の前で、子供が茶碗を差し出し、口上を述べている大変珍しい図です。

因みに、同シリーズの「箱根」は、富士山を遠望する家の中で、二人の男が二人挽きろくろで、挽物を挽いている図で、これまた箱根の浮世絵には、他に例のない作品です。

さて北斎作品についてはこのくらいにして、次に広重作品に移りたいと思います。

## (3) 広重の小田原作品

広重の小田原作品で最も有名なものは、保永堂版「東海道五拾三次之内小田原 酒匂川」です。酒匂川の歩行渡りと遠方に箱根山、その山裾に小田原城と町屋を描いたもので、特に箱根山の表現には、灰・赤・青を重ねたように刷り、見事

な色彩効果をあげています。広重のこの保永堂版の東海道シリーズは、当時盛んになりつつあった全国的旅行ブームを背景に、大変な人気となり、広重は風景浮世絵の第一人者として持て囃されるようになりました。広重のもとには、各版元から東海道物の注文が殺到し始めます。

十三・四シリーズは刊行されたと推察されるこれら東海道物は、後にその区別をわかり易くするために、保永堂東海道とか、隸書東海道とかいう俗称がつけられるようになりました。

これら東海道物の小田原作品を見ますと、構図はそれぞれ違いますが、その多くが「酒匂川」を描いたものであることに気がきます。隸書東海道(嘉永前期・丸清)「小田原」は、酒匂川の歩行渡しを描いたもので、版木の木目で川の流れを表現しているところが見事です。

行書東海道(天保末期・江崎)「酒匂川かち渡し」は、夕焼の箱根山の色彩表現に工夫が見られます。美人東海道(藤慶・嘉永前期)の「旅中衣更」は、

酒匂川を背景に美人が、旅行箱から衣裳を出している図です。

人物東海道(村田屋 嘉永五年)の「酒匂川かち渡し」は、女性の旅人が蓮台に乗って酒匂川を渡っていく図です。

そのほか酒匂川の渡しを画題としたものに、「東海道五十三次細見図会」、「八ッ切版東海道」などがあり、未見のものを加えればまだまだあるのではないかと思います。

## (4) 初刷と後刷

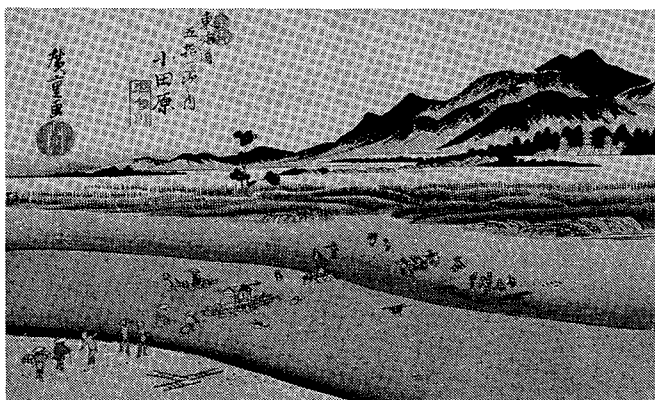
広重の「酒匂川作品」で注意しなければならないのは、後刷があるということです。

ここに紹介する保永堂版東海道は、その後刷で、初刷に比べると、背後の山がゆるやかになり、刷数もかなり省略されています。また河原にいる旅人と人足の人数がずいぶん増えています。

小題の「酒匂川」は同じですが、朱方印の白抜字が、朱文に変わっています。

行書東海道にも後刷があります。後刷は、背景の空雲が刷り込まれておらず、山容の色彩表現も簡略されています。

このような初刷と異なった後刷が生まれていくのは、広重の東海道シリーズの人氣が高く、版元がきつつきと増刷していくなかで、刷の手抜き、版木の摩滅による改刻が行われたからだと思います。



保永堂版「小田原」 (天保前期) 大 錦 (後刷)

(5) 海岸風景

広重の小田原作品のなかで注目されるのは、小田原の海岸風景を描いたものです。

堅絵東海道(鳶屋 安政二年)の「海岸漁舎」は、松の点在する海岸で、地引網を引く漁師、沖に白帆を浮べた漁船が見るといった海岸風景を描いたものです。狂歌入東海道(佐野喜・嘉永前期)の「小田原」も同

じく地引網を引く海岸風景を描いたのですが、この絵には、繁の門雛昌の、小田原の沖の船より見えつらん

霞の海の城の鯨

という狂歌が添えられています。

この二作品は、今はもう想像しようもない、江戸時代の小田原海岸の風景をほうふつさせる佳品といえましょう。(続)

烏蘇里江(一)

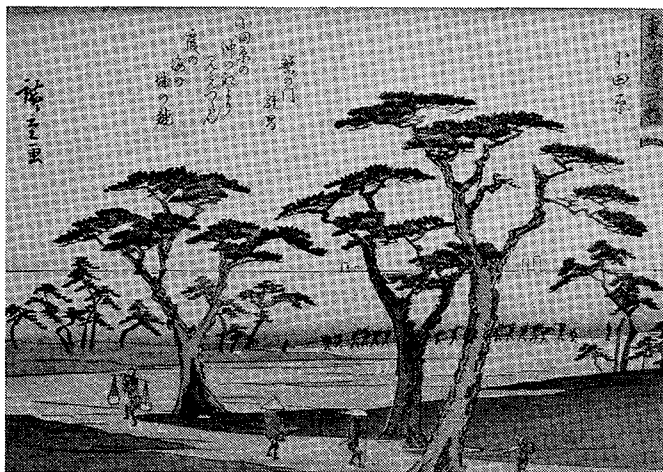
翠子の場合

結婚

リングの花の咲く旅順は、白い花粉がまぶった静かな、置き忘れてしまったような街、昔の要塞、その山上から港を見下ろすと箱庭のような小さな港内が見えます。あの日露の激戦があったと思えぬ景色です。要塞の厚さ二メートルもある分厚いベトンの壁、迷

隠岐威重

路のように濠をつなぐトンネル、それを見ると露軍のねばりっこい防戦の様がしのばれました、ですが、日露の激戦があつてから幾十年もたち、この遼東半島の先端に位置する港町は時代の急激な変化から置き忘れたような静かさを保っておりました。そんな街で私、翠子は小学校に上がり、後



狂歌東海道「小田原」 (嘉永前期) 四ツ切

三浦道寸 辞世の歌

打つ者も打たる者も土器よ 砕けて後はもとのつちくれ

「土器」かわらけ」と読む。今や討つ者も討たれる者も同じ土くれからできた土器に過ぎない。砕ければ、もとの土くれに帰る。討死の期に際しての大悟であり、胸に灯った法灯のゆらめきである。北条早雲に攻められ、平塚の岡崎城を捨て、油壺の新井城を死守し、この辞世の歌とともに果てた。時に永正十年戊寅秋七月十一日。星霜移り道寸死後七十三年、天正十八年同月同日、北条氏政は、道寸と同じ意の辞世の歌を残して秀吉に届した。(橋本阿掬)

に奉天に移り敷島小学校に通いました。恵まれた平和な生活だったことを想い出します。

父は陸軍の無線通信隊に務めておりました。日中事変が始まりますと、急に華北へ行くことになり、兄と私の二人は郷里の熊本に帰りました。

その後父は軍籍をひき、山西省で御用商人となりました。雲域と云う所で、山西省の穀物と木材を扱う協同組合を作りました。

商売は多忙で、面白いように発展して行きました。昭和十八年に、私は呼ばれて山西にまいりました。

内地にくらべますと、樹木も少ない乾き上った土、春に日本まで届く黄塵が生まれる地だと聞きました。そこは急にふくれ上った軍隊の町でございまして、内地にくらべられぬ程物資が豊かではございません。

無事に一年が過ぎ、大分その地になれてきました。近所で付き合っている中国

人の態度が妙によそよしくなり、十九年になりますと大陸の空気に何か不気味な変化が感じられました。

実懇の部隊長の強い勧めで、家財も、商品も捨て値で処分し、一家揃って熊本に帰りました。雲域から内地へ送った荷物は何一つ故郷に届きません、戦局は大分おし寄せまっていたようでした。

熊本にはたいした工業地域もございませんのに日夜空襲があり、一寸街に出る

にも防空頭巾を被り、夜は灯火監制で真っ暗でございました。

そんな中、家で遊んでもいられませんが、軍需工場に行けといわれましたが、近所にはございませんので近くの木材工場に勤めました。毎日の空襲、勤めの半分は防空壕の中におりました。

そんなとき、満洲から嫁を探しに警察官が来ていると、木材工場の主人が父の所に私の嫁入りの話を持ってまいりました。

明治生まれ、頑固一徹な父は、私に何の相談もいたしません。自分で諸の返事を先にしておいて、おまえは満洲に嫁に行けと、命令するだけでございます。

でも当時は若い男は殆ど兵役にとられ、周囲には誰もおりません。それに満洲は知らぬ土地でもなし、旅順か奉天と同じ満洲ならと軽い気持と、内地の惨状、満洲なら空襲もなく、食べ物も不自由しないと聞いておりました。

それに、見るからに丈夫そうな男性、そこに女としての私の打算が働いたことも事実でございます。

あわただしい挙式のあと、昭和二十年五月真っ暗な下関をたち、やっと釜山に渡りました。関釜海峡は米潜の巢で、よく無事に渡れたものでございます。釜山でも警報が響き、一杯のウドンを求めて長い行列が出来

ておりました。警報の間に巷を歩いておりました交番の巡査に叱られるお笑いがございました。本職の警官のくせに、満洲の人はのんびりしていると思えました。京城で汽車を乗り換え、朝鮮の東海岸沿いに走り、二日後に牡丹江に着きました。

牡丹江は熊本ぐらいの街でございます。駅前には真新しい建物がおおく、夜には街に鈴蘭灯がともり、真っ暗な内地の夜にくらべ昼のようでございます。やはり満洲に来てよかったです、空襲のない楽しい新婚の夜を夫の胸の中で味わいました。

それからまた汽車に揺られ佳木斯に着きました。街は牡丹江より少し泥臭い感じがしましたが、でも街路灯がともり、鉛もビスケットも沢山ございました。

丁度佳木斯神社の春祭りや奉天のような所だ」と決めておりましたことを後悔いたしました。ここから日本は余りに遠く、今更逃げ出す事も出来ません。任地は満洲だとしか聞いておりませんが、夫もそれ以上は深

りもっと先に行くのだ」と申しそれ以上何も言いません。

三江会館とか申す宿に泊りました。ご飯に半分大豆が入っており、戦争の臭いと、任地不明が不安をかきたててまいりました。

撫 遠

数日後、後ろでゴトゴト水車が回る外輪船で松花江を、同江で黒竜江と合して下ってまいりました。船中で二泊し着いた撫遠、波止場から一本の道が堤に登り、その道の両側に貧しい中国人の家が軒低く並んでいるだけです。もうこの黒竜江の下流には満洲の部落はございません。満洲の東北一番の北の果てでございます。

牡丹江や佳木斯の街で見た街路樹もございません。家にとぼしているランプがともっているだけです。

乙女心に「満洲とは旅順や奉天のような所だ」と決めておりましたことを後悔いたしました。ここから日本は余りに遠く、今更逃げ出す事も出来ません。任地は満洲だとしか聞いておりませんが、夫もそれ以上は深

く語りませんが、何だか騙されたという気に襲われました。

撫遠には、県公署、協和会、警察署、電報局、興農合作社などの官の機関、関東軍は二、三十名、日本婦人も三十名ぐらいの極僅かな日本人の集団でございました。

興亜塾という宿泊所に三日泊りました。私達の住宅の準備をしているのだと思いましたが、そこには鉄道が走り、大勢の日本軍がおりました。ここは人も少なく目の前の大きな河の北側はロシアのシベリアでございます。二十歳になったばかりの私は涙にくれてしまいました。(続)

川 柳

高 井 喜 雄

新聞を目で追い耳は妻に貸し

病院で根気を学ぶ待ち時間

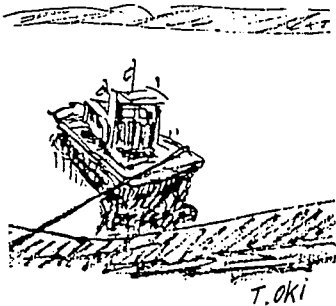
おふくろのゲートボール談義聞いてやり

母一人住む表札に父もいて

司会者は受賞の歌手が泣くのを待ち

「ここが任地ですか？」  
「いや、ここから船に乗

りもっと先に行くのだ」と申しそれ以上何も言いません。



# 福澤諭吉と小田原

## 金原左門

現在の小田原を考えてみますと、明治の初め、福澤諭吉の影響を非常に強く受けたことが感じられます。

明治十三年(一八八〇)自由民権運動が、盛んになりまして、旧相模の国の人達の署名を約二万五千位、集めました、元老院に国会開設の請願書を出しました。その趣旨は、福沢が執筆していますが、そこには独特の福沢の考え方が出ています。

当時、福沢と親交があった一人に、吉野直興という人がおります。吉野は小田原仁恵社の社長で国会開設請願の先駆者です。小田原に關係ある人ではもう一人、

柏木忠俊がおります。足柄県時代の県知事です。福沢の大変な影響を受けているのです。この柏木と福沢との間に書簡があります。

私は小田原の事では国会開設のために建言書を作ったぐらいしか知りませんが、もっと深く関わりがある事が次第にわかってきました。福沢諭吉と福住正兄の關係です。

福住正兄は、今の湯本の福住旅館当主の曾祖父に当たる方で、この福住に、福沢が非常な影響力を与えています。

福住を通じて次第にわかった事は、二見初右衛門さんとか、初代町長金井徳左衛門さん(十四代)も、福沢の影響を受けている事がわかりました。

私は、福沢諭吉が小田原



福澤諭吉と小田原 金原左門先生

私に、福沢諭吉が小田原

に与えた影響力が強かったと断言します。小田原だけでなく、湯本にも、二宮にも福沢は影響を与えていることがわかります。

それでは一体如何して福沢諭吉が小田原と関わって来たか見ていきますと、諭吉は九州中津藩の下級武士の出身でして、江戸に出る途中箱根越えをし、湯本に泊った時、その湯本が大変気に入りました、それがきっかけになっていたと言えます。正兄はその時既に湯本におりました。

正兄は、平塚・片岡の古い地主である大沢家の出身で、天保の終り頃から安政にかけて、二宮尊徳に仕えていました。『二宮翁夜話』という本を著しています。彼は小田原の辻村(今の辻村農園を作った先祖)か、福住か、養子先を二つから選ぶ立場にありまして、当時この辺では、最高の金持ちであった辻村家、一方は大変落ちぶれどん底状態にあった福住、正兄はこのうち、後者を選んだのです。佐々井信太郎(現報徳記念館館長の父上)が書いた『福住正兄翁伝』にも福住を再興し、湯本も興し、その頃、福沢

諭吉に出会った事がのって

います。

福沢の日録によると、明治三年から十一年迄に七回湯本に来ています。現在と違って交通事情から推測しても、当時としては、大変足しげく、湯本に来ています。しかも、湯本と小田原

に関わりを持つようになり、

吉野直興などと親交を結んだ時は、注目すべき事に、彼の生涯に於ける全盛期、即ち明治三年三十七歳から明治十一年四十五歳までの最も油ののった時の出会いでありました。

慶応義塾大学に福沢諭吉研究センターがあります。そこでは、年に一回年報を出して福沢諭吉の知られざる側面を次々に明らかにし、研究成果をあげています。

研究センターによると、福沢諭吉は行動派でして、各地へ出掛けて行って、資本の蓄積など近代経済の方法を手ほどきしていましたが、その成果の程は良くなかったと言うのが定説となっています。

例外がこの小田原の辺なのです。県知事柏木との關係は書簡からもよくわかりますが、もう一人は福住正

兄です。柏木も福住に関わり、良い意味での三角關係になっており、この事が非常に重要ではないかと思えます。

明治四年十一月に足柄県が出来、県庁はここ小田原にありまして、柏木忠俊はここにおりました。

柏木忠俊の家は葦山にありまして、前歴は、江川英竜(太郎左衛門)に仕えて、摠藏と言っておりました。十四才で太郎左衛門の書記になり、代官職になりました。代官と言うのは大変偉く大番頭であります。更に伊豆七島を巡視したり、最も重要な役を果したのは、討幕派江川の大参謀としてでありました。

その柏木が、近代に入っ

て参謀にしたのは福沢諭吉でした。柏木が知事に就任して一ヶ月もたない柏木に手紙を送っています。

そのころ、福住正兄は薩

藩置県になるすぐ前(小田原県前)大久保藩知事の時に、藩校で国学を教えていた。旅館経営は子供にまかせ、当時名を正兄と改め、

今で言うパートタイムの教師として教鞭をとっていました。

福沢の手紙には、小田原には藩校はあるが「格別学校らしき学校もこれなく」したがってこの度、豆相合併し、その県庁の所在地小田原に「真の洋学校御取立て相成るべき」とある。要するに西洋流の学校をつくれと柏木に言っております。当時の県知事は今と違い、独断で実行する力を持っていました。その県の行政の一番トップにある柏木に直接要請している。その他経済についても話を差しはさんでいる。福沢は、各地でいろいろな知恵を授けて成功しなかったが、小田原では良かった理由はそこにあります。

柏木家文書の中に、県知事時代のやろうとしていた政策は、立派なもので、この様な民主的な人が小田原に居たのかと驚く程でした。たとえば、明治維新政府が、大区小区という地方制度を定めるとき、神奈川県はその実施に困難しているのに、足柄県はそれより早く実施し、区長や戸長を集めて広く民の意見を聞いて、政策に役立てる方法を取っているのです。それは恐らく、福沢の翻訳したイギリス

ス議会の話が下敷になっていると思われれます。次に柏木は何をやろうとしたかと言うと、まず福沢が提起した学校を作ること、教育です。二番目は道路を作る。三番目は産業を興すことで、道路について話しますと、為政者としての柏木に影響を与えたと考えられます。道路を重視した福沢は、直接福住にこの問題を話しております。明治八年(一八七三)、福住正兄、小田原湯本間の道路改修への着手がそれで、これは福沢の影響を深く受けた結果です。福沢諭吉は、明治六年の三月から四月にかけて、塔の沢福住に湯治しているとき、『足柄新聞』に次のように執筆しています。塔の沢が湯本と遠い距離にあるのは、須雲川と蛇骨川と合流する地点が非常に障害になっているからで、そこにきちんとした橋を架け、新しい道を開けば、土地が繁昌すると言っています。

これは、道路建設予算百両を、正兄以外が出すのもったいないと出し渋っていたのです。福沢は出水で流れた板橋は一回架けると十両かかる、十回流れたら百両になる、だから流れない橋を作るべきではないか、と言っているのです。福沢流の考え方は、金を稼ぐには学問が必要であるということにある。福沢は、柏木に対して「人間渡世の道は眼前の欲を離れて後の日の利益を計る事が最も大切なり」と言っている。これを福住正兄が受け止めるわけです。明治八年に、小田原湯本間の道路改修に着手、と言うのはこの事です。当時、今の風祭から抜けて行く道は、馬車が通れなかったと言われています。道巾が大変狭くて、風祭から入生田へ抜ける道は歩くのが精一杯だと言っ程です。そこで、福沢諭吉はこう言っています。「箱根山に人力車を通し、数年後には山砕きて鉄道を計る企てを成さん」明治六年(一八七三)に福沢はこう提言し、これを正兄は受け止めたのです。ご存知のように、福住正兄は独特の考え方をしてお

ります。それは当時明治六年(一八七三)から明治八年(一八七五)にかけて何冊かの『富国捷徑』、国を豊かにする近道と言う事ですね。この本を書いたのです。そのうち漢文で書いてあるのはとても読み切れませんが、何冊かは読んでみました。独特の考え方をします。福沢諭吉のハイカラな思想と報徳の日本の伝統的な考え方がドッキングするのは、非常に面白いことですね。結局、福住だけだったか、或は塔の沢の一の湯の主人もその辺を受け止めたかと思っております、それはわかりません。ともかく、福住の座敷の中に倉がありまして、その中に福沢諭吉関係の物が非常に多いのです。すごいなと思っているわけです。福住正兄は、福沢の思想に大変共鳴して、ご存知のように着手したわけです。明治十三年から十四年にかけてだと思いますが、道が非常に良くなり、馬車も通れるようになるのですね。明治二十年代になりますと、今日の道の原形が出来上がりました。福沢諭吉の考え方は、日

本を近代化していくためには、何と言っても動脈、道路鉄道を造ることを強調しているわけです。それが橋で塔の沢と湯本を良くし、湯本と小田原を結びつけていくと、私は思います。福沢のもう一つの『帳合の法』と言う本は、近代的商売のことで、近代的会計簿を作り、どうしたら元手が溜まっていくかという事を考える。言うなれば単なる商売ではなくて、経済の発展を進める資本家をどう作るか、彼はキャブテン・オブ・ザ・インダストリー(企業家)という言葉を使っている。そういう経営家を作っていく、その事業をビジネスと言っています。それを会計簿を作ってやるという事です。福住正兄はもう第一線から離れてしまいましたが、それを大変良く受け止めていたわけです。丁度この頃に福沢が出したもう一つの本『学問のすすめ』と『文明論の概略』と言う名著があります。このうち『学問のすすめ』の一番の基本は、近代的経済の術、つまり実学を如何に身につけるか、これが根底にあるのです。



例えば経済の法則を論じている。商売の方向を一定しなくてはならない。そのためには、アダム・スミスのように、ミズル・カラス(ミドル・クラス)を作り出して行かなければならない。中産階級のこと、要するに資本家のことなので

す。日本では、『官』の力と『私』の力によって、富の力を作り出して行くこと、これをその中で提唱しているのです。判り易く言うくと、『官』とは、柏木の立場で

す。『私』の力は、福住の力です。これをバランスとっていくのが、富の力を作り出して行く事です。『私』の力は、ミズル・カラスです。小田原の当時の実業家今井徳左衛門、江島平八、吉田義方、この人達の考え方は福住の影響を受けていると言われています。全国でめずらしく、小田原は町民報徳と言われてきた。(報徳は農村に多いのですが)そういう事を示す材料があります。ところが単

なる町民報徳ではなく、福沢の息がかかっています。福沢の『学問のすすめ』の中で説いている様な考え方なのです。町の一審局であったり、お茶屋であったり、呉服屋をやっていたりと言う事ではなくて、自覚としてミドル・クラスの見識と実力と、自負心を持っているべきである。これは『学問のすすめ』第五編にのっています。第十六編の中では、議論をし、実業をしていくとありますが、議論を実際に行っ

ていく事を強調し、協同の力を説いておられます。小田原の人が、横のつながりを持って町を再興していったのを、認めざるを得ない。単に町人同志が敵愾心を持って、競争するのではなく、めずらしく横のつながりを大事にしていく。小田原の図書館にある町関係の小冊子を見てもよくわかります。小田原は、明治の初め非常に貧乏な所でした。平塚の金目川流域の、南金目や片岡と比べると、ずっと遅れている所でしたが、町づくりを町の人達が協同の力でやっていく。それは、福沢の手紙で紹介しましたが、目の前ばかりでなく、もう少し先を見つめていく、つまり計画性を身に付けていたのではないかと、思うわけがあります。それは数字

と経済を結び付けていく考え方があります。明治十年(一八七五)に、足柄県が神奈川県に合併になりました。伊豆は静岡県になっていくわけですが、たとえば、小西薬局の小西正蔭は、その後神奈川県議会議長になっています。第一回目の副議長です。ここでも小西をとおしてなお、経済と政治を結びつけて行くという、その背景には福沢の考え方が生きていたと言いう事ができると思います。

# 亥の子ぼた餅

## 富田千春

我が家では今でも十一月初の亥の日には、ぼた餅を造って神様に上げてお祝いをしていく。今日は亥の子なので、知人の家に配ると「亥の子って何ですか」と云われる家が多い。

一昨年の秋千代公民館で小田原市史編さん室主催で古老三十名程集って、この地方の埋もれた民俗行事の座談会がもたれたが、この

席でもこの話は出なかった。県西部の民俗調査報告で酒匂川東岸の民間信仰、年中行事等にも全然記載されていない。

### (1) どんな行事か

旧暦十月(神無月)初日の亥の日に、亥の子餅を造って食べると、万病を除け子孫繁栄するといわれ、平安朝時代から天皇以下百官こ

の餅を食べて祝ったという後世民間でも秋の収穫祭と共に、この日新穀でついた餅を食べて祝う『源氏物語』『古今著聞集』等にも載っている様だ。

神無月には八百万の神々が出雲大社に集るが、恵比須神、道祖神、田の神、山の神等は留守神様で残る。農村では亥の子を田の神とし、春に山の神が里に降り田の神となり、収穫後山の神としてこの日山に帰る。一年間苦労した作物が無事収穫出来ての喜びの祭日だ。西日本では、石に縄をかけて土を突いて廻り、家々

から餅をもらって歩く、「亥の子突き」という子供行事がある。

関東では十日夜(とうかんな)薬鉄砲の行事がある。昨年十一月、足利、太田方面史蹟めぐりの時、丁度世話人、子供達が実際やっている所に出会い興味深く眺

めた事があった。芋がら(里芋のずいき)を芯にして薬で包み、丁度野球バットの形を造り、地面をたたくきつける、パンパンと音がする。ガキ大将を中心に競争ごっここの様な子供の行事がある。

先日書店に行ったら「こ

ども歳時記」という本があった。著者は千葉県の人、房総地方の子供の遊びの事が書かれていた。十月の項に亥の子の事が書いてある銚子市名洗地方の子供三人一組となつて、サンダワラを棒でかつぎ家々を廻り、みかんを貰つて歩く子供の行事があった。

私達が子供の頃は亥の子は何処の農家でも行われていて、十一月の亥の子ばた餅を楽しみに待ったものだ。この夜は夜業にサンダワラを作るようになっていた。米俵は座つて出来るが、サン俵は立って、海老の様に腰を折り曲げての作業で満腹では苦しくて出来ない。夕食の御馳走のぼた餅も程に食べる昔の人の知恵でこの組合せが面白い。尚この日、炉開きする習で寒くてもこの日が来ないと炬燵はあけられない。自家では今でも掘炬燵を使っているが、普通り亥の子を祝つて炬燵をあける。

昔から正月十五日を上元、七月十五日を中元、十月十五日を下元といふ、三元併せて中国伝来の節日であった。一年を十二支に当てると、正月の寅から数えて十

月は亥の月に当るので、亥の日を祝つたとも思われる。

(2) ひと月遅れの行事

十一月に亥の子を祝うというと、神無月は十月で、十一月は霜月だ、十一月にするのはおかしいとよく云われる。明治五年十二月に太陰曆(旧曆)が廃止され現在の太陽曆(新曆)になつたがそのショックと混乱は大変なものだった。百濟から漢曆が伝えられたのが、欽明天皇十四年というところから四百年以上も昔である。日本国民はこれによって生活し、色々の行事を行つて来たので、曆は変つても私達の生活は急には変えられない。月の大小、閏月色々差はあるが、ひと月遅れにすると、新曆と旧曆がどうやら合うので先人の知恵というか、ひと月遅れの行事がこの地方には今だに色々残され生かされている。

三月三日、桃の節句というが三月初では桃はまだ咲かない、足柄上郡、松田地方では一カ月遅れの四月三日に雛祭をしている。

六月と十二月晦日が大祓(おおはらい)で半年間積もつた諸々の罪と穢(けがれ)

を除く大きな行事だが、延喜式に載せられている西郡で一番古い神社、由緒の深い松田町の寒田神社の例祭は七月三十一日、ひと月遅れの禊(みそぎ)の祭として有名である。

七月七日の七夕も私が子供の頃は八月七日で何処の家でも盛大に行つたが、今は新曆で平塚が有名になり一月遅れは仙台等が続けている。

お盆は小田原市では旧市内だけが七月に、他は全部八月だ。夏休みもからんで月遅れのお盆が全国的行事になつている。八月を今でも盆月といっている。

五節句の一つ九月九日の重陽の節句は新曆では軽視されている様だが、尚当地の神社では、十月九日の例祭が多く、古老はお祭りや節句を一緒に考えている。秋祭りの良さを兼ねて一月遅れが主流になつている。

夷講、お会式、その他暦と季節、自然、農耕との生活関係が深いだけに長年、培われた旧曆、それを上手に活かされた、ひと月遅れの行事も大切だ。この他にも月遅れの行事数えればまだまだ沢山ある。

(3) 幻庵宗哲おぼえ書

今年是小田原合戦四百年目である。昨年は北条幻庵没後四百年であった。幻庵は北条早雲の六十一才の時の子供で、二代氏綱は幻庵の長兄である。天文十年に兄氏綱が亡くなった後は、一門の長老として三代氏康の後見を兼ね、黒幕的宰相で、文芸、武略、仁義にも秀でていた。氏政、氏直五代に仕え、小田原落城の前年九十七才でこの世を去つた。

永禄五年十二月、幻庵が七十才の時、氏康の娘が、武蔵国世田ヶ谷城主吉良氏のもとに輿入れした。その時幻庵は結婚して大名の夫人となるその心得「幻庵おぼえ書き」を女文字一つ書きにして廿四ヶ条を巻紙に書いて持たせてやった。婦人訓で、幻庵の人となり教

養の深さ、当時の故実を知る上でも大事な資料である。その一つに、いのこもちるの事、というのがある。

「近年小田原に、しかじかと御祝候はぬまま、様態人わすれ候、されども聞き及び申ふんは云々記され最後の方に、この祝は「天歴の御みかどの御とき、康保年中、紫式部しいだしたると古き物にはみえ候。だいの御まつりごと数々の内にて候。武家に御祝も、尊氏次来は公家に御なり候まま御祝にて候へく候。ついで生才覚申候」

この他今でも色々教えられる事が書いてあり、四百年以上もの昔、大名夫人として嫁ぐ心得として細かい心使いの大切さが手にとる様に分る。

現代社会は潤いのない殺伐のものになって来たが、我々日本国民を今日迄はぐくみ育ててくれた祖先が、永年続けた行事を少しでも大事にして引き継いで行きたいものです。

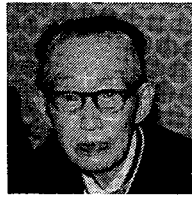


北条 幻庵

### 大正・昭和と 著名な文人と交遊のあつた

#### 小田原御幸浜・養生館主

### 西村隆一さんに聞く(五)



本稿を始めて掲載したのは、昨年九月でした。西村さんは、そのとき既に体調を崩されていました。お話しを聞き書きしましたのは、家を新築されるため浜町の方に仮住まいされているときで、計三回にわたりました。

紙面の都合で一挙に載せることもできず、回を重ねる度に、いつも命を永らえて欲しいと願っておりましたが、去る八月二日、八十八歳をもって生涯を閉じられました。今後まだ、二、三回続く稿はお読み頂けないことになり、残念です。御冥福をお祈りします。

#### 来遊した文人たち

— どういう方たちが養生館に泊りにこられたんですか。

「北原白秋さんの他に、親戚になりますが、中条(宮本)百合子、中原綾子、河野桐谷。

雑誌を出していた関係もありますけれど、福田正夫さん、この方の作品に、養生館を折り込んだ長編叙事詩があります。『婦女界』

に連載されました。

福田さんは、なかなかの飲み助でね、一緒になって飲んだりしました、家でね。仲々活発な愉快な方でした、ガラガラして……」

— 他に泊られた方は?

「先に申しました今東光。詩人の大木惇夫さん、西条八十さん、歌人の吉井勇さん、それに内藤鑑策さん。

それから、ここに泊って原稿を書いている方もいますね。そういう方で、長谷

夏草のえのころくさき瓶に挿し「此の世は	さみしかつたでせうかしと吾が言問はん	群蝶のころよリズムと脱け落ちて中庭に滑	ゆる蝶のころははや	群蝶のころよ	古き友西村隆一歿す	鈴木貫介
---------------------	--------------------	---------------------	-----------	--------	-----------	------

川如是閑さん、実に永い滞在でした。それから、同じく評論家の正宗得三さん、劇作家の北條秀司さん、お二人も長期滞在された方です。

小林秀雄さん、小説家の武田麟太郎さんや邦枝完二さん。

それから、童謡では葛原しげるさん、日本画家では池上秀敏さん。ほかに湘南伊豆文学散歩の野田宇太郎さん。

他に宿帳にサインが残っている著名な方では、島崎藤村さん、三好達治さん、佐藤拓石さんなど文人の方々

山路ふみ子さん、高峰秀子さんが。

私は知らなかったんですが、東條英機大将が泊っているらしいんです。新婚旅行で泊ったらしいです。これは、十字町の綿屋の井上宗太郎さんが東條の妻君から直接聞いたというから、ほんとうでしょう。

それに、長く滞在した方に「のらくろ」の田川水泡さん、この方は仲々愉快な方ですね。

私んとこで原稿を書いては東京に送っていましたね。田川水泡さんは夜になると出かけるんですね。出かけ

ては、ちょっとした料理屋でお酒を飲んで。いち度、酔っぱらってよその看板を外して来たりして……。あるとき、宿に戻ってきて『困っちゃったよ』と笑いながら話をするので聞くと、立小便をしたんですね。そうしたら、駐在(巡査)につかまっちゃって、『お前はダレだ』と叱られたので、「田川水泡」だといったら「あ、そうか、そうか」と許されたそうです」

#### 北村透谷碑について

— 透谷記念碑を建てるについて島崎藤村の「答申書」をお持ちになっているのは、どういう訳でしょう。「透谷記念碑を建てることは、最初小田原保勝会から起ったのです。小田原保勝会の事務所は小伊勢屋さんに置かれ、尾崎亮司さんが会長のようなものでした。この方は、なかなか功績のある方ですよ。昭和三年のお濠理立て反対運動の先頭に立ちました。私も小田原旅館組合の役員として、小田原城理立反対同盟の発起人として名を連ねました。—— 尾崎さんは北村透谷の碑を建てようじゃないか



# 材木屋綺談

## たかた・きくせん

同じ材木屋仲間を誘って島に渡った。その頃は便船もない孤島であつたが、島は二十

五戸の住民が、住民が慣わしであつた。ずっと昔

からそうやって暮らしてきて、

神様の木を薪にしては罰があたる、松葉も此処で燃やしてはいけない、全部島から持ち出してくれと言われて驚いた。仕方なくもう一隻の船をわざ／＼雇ってこれを伊東港に運び、浜の人々に只で呉れてやったが、この費用も馬鹿にならず、折角の儲けも大分減ってしまった。安いものには気を付けろと言うことだと悟った次第である。

「ええ、それでいよいよ建設にとりかかろうとしたら、当局から待たされたので、その理由はですね、北村透谷は自殺しているじゃないか、そういう者の碑なんか建てちゃいけないということなんです。困りましたね。それで、北村さんと非常にご懇意であつた島崎藤村さんの所に話に行こうじゃあないかと、いうことになったのです。」

それは物価の安かつた昭和はじめの頃の話である。熱海の沖の初島に松の大量の賣物があると聞いたので、

棲む半農半漁の貧しい村であつた、賣物の松の木はこの島の初の木神社に在った。枯損木ではあり、余り上質のものとは思えなかつたが、売値が何と九十円だと言うので一も二もなく賣買契約をした。何しろ職人の手間が一日一円五十銭くらいの時代だとしても時価評価にすれば三百円以上のものであったから、これは拾いものだと思つた。

私はこの島に二日程滞在して職人を残してきたが、一ヶ月後松の木の製材が終わり、いよいよ機動船をチャーターして伊東港へ運ぶことになった。用材にならない枝や松葉は村の人に只で呉れてやろうと言つたところ、

「ええ、それでいよいよ透谷碑建立の話が出まして！私も発起人に名を連ねました。透谷会を組織してー。それから、福田正夫さん牧雅雄さんなんか呼びかけたんです。牧さん、この人は彫刻家ですね、谷津におられましてね。この二人に呼びかけて発起人になつて貰いました。尾崎さんが二人に呼びかけられた訳ですね。」

「ええ、それでいよいよ建設にとりかかろうとしたら、当局から待たされたので、その理由はですね、北村透谷は自殺しているじゃないか、そういう者の碑なんか建てちゃいけないということなんです。困りましたね。それで、北村さんと非常にご懇意であつた島崎藤村さんの所に話に行こうじゃあないかと、いうことになったのです。」

### その一、孤島で儲け損う

と保勝会の会員に呼びかけたんです。私も保勝会の会員でした。尾崎さんと非常に年輩も違いましたが、非常に尾崎さんが、私を可愛がってくれましてね。そういう訳で、朝な夕なに尾崎さんのとこに出入りしていません。

それで、尾崎さんより透谷碑建立の話が出まして！私も発起人に名を連ねました。透谷会を組織してー。それから、福田正夫さん牧雅雄さんなんか呼びかけたんです。牧さん、この人は彫刻家ですね、谷津におられましてね。この二人に呼びかけて発起人になつて貰いました。尾崎さんが二人に呼びかけられた訳ですね。」

「ええ、それでいよいよ建設にとりかかろうとしたら、当局から待たされたので、その理由はですね、北村透谷は自殺しているじゃないか、そういう者の碑なんか建てちゃいけないということなんです。困りましたね。それで、北村さんと非常にご懇意であつた島崎藤村さんの所に話に行こうじゃあないかと、いうことになったのです。」

「ええ、それでいよいよ透谷碑建立の話が出まして！私も発起人に名を連ねました。透谷会を組織してー。それから、福田正夫さん牧雅雄さんなんか呼びかけたんです。牧さん、この人は彫刻家ですね、谷津におられましてね。この二人に呼びかけて発起人になつて貰いました。尾崎さんが二人に呼びかけられた訳ですね。」

「ええ、それでいよいよ透谷碑建立の話が出まして！私も発起人に名を連ねました。透谷会を組織してー。それから、福田正夫さん牧雅雄さんなんか呼びかけたんです。牧さん、この人は彫刻家ですね、谷津におられましてね。この二人に呼びかけて発起人になつて貰いました。尾崎さんが二人に呼びかけられた訳ですね。」



(岡部忠夫)

# 私の早川村誌(上)

## 北条宗時の墓所

青木友吉

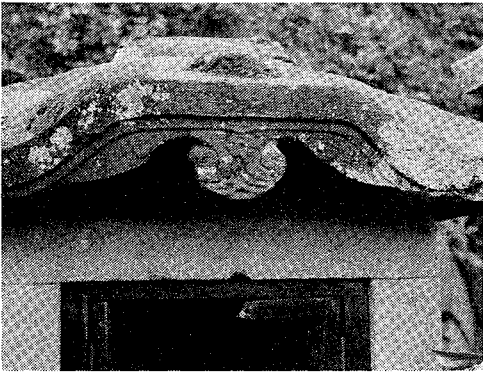
〔註〕  
『相中棟志』に「北条三郎宗時ノ墓所」と題して次のことが記されている。

早川ヨリ海蔵寺行中道ノカタハラニ塚アリ  
其上ニ石ノ小祠アリ  
三ツ鱗ノ紋ヲ切附タリ  
里俗アヤマリテ公家方墓所ト云平宰相成輔ト混雑シタル説也

吾妻鏡ニ云フ、北条三郎宗時早川ノ辺ニテ祐親法師ノ爲ニ討死ト云々

この資料に記された、塚のあった場所は、国道一三五号線と化して、箱根登山鉄道湯河原行き下りバス停「早川港」(早川一丁目)の標識が残るだけで、その跡形は全く消滅している。ただ塚上の小祠は正蔵寺の墓地の高い所に移転されている。

早川の塚の上にあった供養塔



今は、村人達から塚があったことさえ忘れられている。

〔註〕

『相中棟志』は、智・仁・勇の三巻に分れ、小田原・箱根を中心とした相模國の歴史、地理、史蹟、名勝、社寺などについて記したものである。

著者の三浦義方(一七一一～一七六〇)は小田原藩士で、劍術・槍術の師範であり、和歌、俳諧をよくした。  
なお、この書を世に出したのには、石井富之助氏で、本書の解題、校訂をされている。

正蔵寺の墓地に移されたこの小祠の上部には、写真が示すように、九星紋と幕(?)三つの横にへ形の彫られているだけで、三鱗の紋はない。三つの横へを鱗と解したものかどうか不明である。

一方、明治十八年十二月に脱稿の『皇國地誌』(村誌、早川村)は、この塚を無名塚としている。  
無名塚或は辨天塚 早川ノ南辺田間ニアリ高尙丈周圍貳十間塚上ニ古祠アリ 塚辺ノ田ヲ耕スモノ往々朽刃ヲ得ト云フ 其何塚タルカ伝ハラズ

『吾妻鏡』の治承四年(一一八〇)八月二十四日の條に次の通りに記されている。又云北條殿同四郎主從等者、經菅根湯坂欲し越甲斐國、同三郎(宗時)者自土肥山降桑原經平井郷之処、於早川

辺被圍祐親法師軍兵爲小草井名主紀六久重被射取訖。茂光者依行歩不進退一自殺云々。

この『吾妻鏡』の記述について、『新編相模風土記稿』は、

サレド(早川)前後記スル所ノ地名皆豆州ノ属ナレバ、恐クハ此川ノ事ニハアラザルベシ。豆州ニヒエ川ト云所アリ、是等ヲ誤写セシモノナラン

と、相模國早川であることを否定している。  
これに関連して『増訂豆州志稿』を調べてみると、大竹村(函南町)ノ東、神戸坂ノ半腹ニ五輪塔ニ基相並ブ大ハ宗時、小ハ狩野茂光ノ墓ナリト云とある。

これら『吾妻鏡』や『豆州志稿』に基づいてか、土地の人は、墓の傍に碑を建立している。碑文は、今迄記してきたものと重複する点が多いが参考までにあげてみよう。

北條宗時 狩野茂光 碑  
旧記ニヨレバ大竹村ノ東

神戸坂ノ五輪塔ニ基相並ブ、大ハ宗時小ハ狩野茂光ノ墓ナリ。  
云フ俱ニ源頼朝ニ從ヒ石橋山ニ戦ヒ軍敗レ、土肥村ヨリ桑原ニ降り、平井郷ヲ経ルノ際、伊藤氏ニ圍マレ遂ニ戦没ス云々。  
東鑑ニヨレバ建仁二年(一一二〇)六月朔、時政夢想ノ告ニヨリ菩提ノ爲メ墓ニ建碑ス

(裏面)  
発起人 田中良助 奥山藤吉 (外省略)

昭和十九年九月二十三日建立 大竹区 神戸組

また、函南町教育委員会は、「北條宗時の墓」と記した案内板を建てている。

土地の人々から「時まつあん」と呼び親しまれ宗時神社としてこの地に祭られている。  
五輪の小塔、大小二基があり、大が北條宗時、小が狩野茂光の墓といわれている。  
石橋山の合戦に敗れ後退の途上この地で戦死、後年父時政によりこの台上

に祭られたといはれてい  
る。

函南町教育委員会

『吾妻鏡』建仁二年(三  
〇二)六月一日の條に  
(時政)  
遠州令下「向伊豆国北条  
給。依有夢想告爲訪亡  
息北条三郎宗時之菩提」

丹沢の植物 ⑤

城川四郎

給と彼墳墓堂在当国桑  
原郷之故也

とあるが、時の権力者北  
条時政が長子戦死の二十二  
年後に墓を建てたとは納得  
できない。時政とすれば、  
長子戦死と判断した石橋山  
合戦後の早い時期に故郷に  
大竹村の東神戸坂に建墓し

たのではないだろうか。  
それに、もう一つ疑問が  
あるのは、『源平盛衰記』  
と『吾妻鏡』を比較したと  
きに、くい違いがあること  
である。

前掲の『吾妻鏡』には  
「同(北条)三郎は土肥山  
より桑原に降り平井郷を経  
るところ早川の辺において

祐親法師の軍兵に囲まれ小  
平井の名主紀六久重がため  
射取られおわんぬ」とある。  
一方『源平盛衰記』には、  
「北条次郎宗時、新田次郎  
忠俊、馬の鼻をひき返して  
戦ひける程に甲斐国任人平  
井冠者義直と伊豆国任人新  
田次郎忠俊とはせならへて  
くむんで落ちさしちがへ死  
花をぶら下げて咲く。

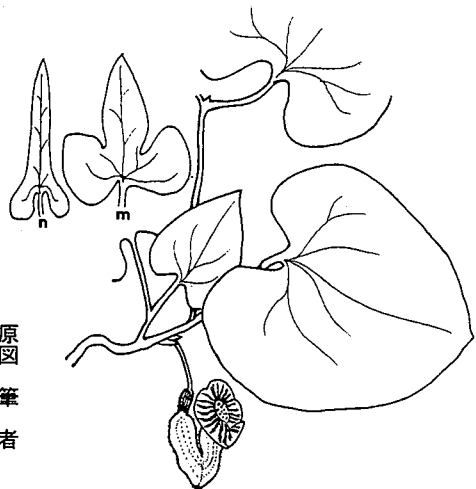
内ではごく普通の植物であ  
る。これに対しタンザワウ  
マノスズクサは筑波山から  
静岡県の秋葉山にかけての  
太平洋側内陸部にだけ分布  
するという面白い分布様式  
を示す。丹沢にだけ分布す  
るといふわけではないが丹  
沢ではじめて気がついたの

で丹沢の名を冠した次第で  
ある。つる植物で成熟株は  
他の植物にからまって数米  
ものび、六月頃奇妙な形の  
花をぶら下げて咲く。

同じ神奈川県の中でも丹  
沢山塊と箱根山系とは植  
物にかなりの違いがある。  
ここに紹介する植物もその  
代表的なものの一つである。  
その名をタンザワウマノス  
ズクサという。植物に詳し  
い方でも聞いたことがない  
とおっしゃるに違いない。  
実は昨年、筆者が発表した  
ばかりで、図鑑類にはまだ  
登場していないからその名  
はほとんど世に知られてい  
ない。この植物はオオバウ  
マノスズクサという植物に  
よく似ているので今までは  
それと一緒にされていたも  
のである。  
二十年も前からこれは違  
うものだと思いがら、ゆっ

くり調べる時間がなくてつ  
きとめられなかったものを  
幸い機会に恵まれて今回はっ  
きりさせることができた。  
オオバウマノスズクサとの  
めだつた違いは未  
熟株の葉の形であ  
る(図のmとn参  
照)。  
このタンザワウ  
マノスズクサは神  
奈川県内では丹沢  
山塊周辺だけに分  
布し箱根山系には  
全く分布しない。  
もともとオオバウ  
マノスズクサは関  
東南部から九州に  
かけての太平洋側  
に分布しその地域

タンザワウマノスズクサ (うまのすずくさ草科)  
Aristolochia khempferi Willd  
Var. tanzawana Kigawa



原図筆者

m...タンザワウマノスズクサ 未熟株の葉形  
n...オオバウマノスズクサ 未熟株の葉形

にたり。北条次郎は波ぎわ  
をあゆませ落ちけると伊豆  
五郎助久かけならんどり  
くんで落ちにけり。両虎相  
たたかいにいのちほろぼし  
名をとどけり」とある。  
『吾妻鏡』は鎌倉幕府自  
身で編纂したものであり、  
これに対して『源平盛衰記』  
は戦記文学であるので、両  
者を比較するには無理があ  
ろう。『源平盛衰記』の北  
条次郎宗時は『吾妻鏡』の  
北条三郎宗時のが正しいか  
も知れない。  
しかし、『吾妻鏡』の幕  
府の創始期の記事のなか  
には、史料的に確たる材料が  
あって書かれたものではない  
、とされている。特に合  
戦については、そのことが  
いえよう。『源平盛衰記』  
は、『平家物語』の諸伝本  
の伝承を集成したと言われ  
ており、内容全部が創作さ  
れたものではなからう。  
そういう観点からは、北  
条宗時が「波ぎわをあゆま  
せ……」と、宗時の死に場  
所を早川の辺としても、不  
思議ではないような気がす  
るし、『相忠禊志』の著者  
三浦義方の見識が生かされ  
る感じでもある。

# 相州曾我岸村と

## 天津神社(一)

### 西山銚太郎

#### 一、曾我岸村

相州足柄下郡曾我岸村の開村は何時の頃だか分らない。現在の曾我岸自治会は、永塚部落迄家統きになつてゐるが、大正十一年下曾我駅の開業迄は、曾我山の麓に殆ど昔のまゝだった。今部落の旧家柏木温氏方に残る古文書の中からその様子を見る事とする。

寛永拾七年(一六四〇年)

相州西郡内曾我岸村地誌帳

田畑方辰九月 日

寛永十七年

辰九月五日

松崎源右ヱ門  
安野九郎左ヱ門  
諸星左ヱ門  
森崎彦左ヱ門

屋敷内訳

二畝十二歩 曾左ヱ門  
五畝 四歩 李右ヱ門  
三畝十八歩 仁左ヱ門  
二畝 歩 市郎左ヱ門  
三畝十八歩 藤左ヱ門  
三畝 歩 金右ヱ門  
一畝十二歩 長右ヱ門  
一畝二十四歩 長右ヱ門  
二畝 三歩 善右ヱ門  
四畝 歩 寿左ヱ門  
一畝二十六歩 太郎左ヱ門

畑五町五反十八歩

畑一反十九歩 寺免

屋敷 十八歩 地藏堂免

一、山畑四町二反七畝一歩  
四町十一歩

三反六畝二十歩 寺免

一、日損水損場

田二町余大日照但シ日損□□

田六町余馬不入深田

田二町八反余大出降 水損仕候

一、井せき

金手村ヨリ酒匂せき上げ申候  
此せき田八反余之所江水掛ケ申候

一、松木御林一ヶ所 長二百三十間  
横四十五間

曾我岸村より此後十五町  
寛文九己ノ年より新御林ニ成  
此御運上永二百文 御運上年々山御  
奉行衆へ上納

一、永四百五拾文 山年役

一、薪取申山 正月より十月迄塔沢畑宿山  
ニ而薪申候  
此道法五里但シハラミ之山

一、霜月より極月迄 当村御林之落葉かき申  
候  
此道法五里但シ入巡之山

一、馬草苅申山五月六月ハ古怒田山之苅申候  
此の道法二十町但シ入巡之山  
七月八日ハ畑宿山ニ而苅申候  
此道法五里但シ入巡之山

一、百姓内三ヶ所

一ヶ所 長四十間 柏木八兵衛  
一ヶ所 横二十間  
一ヶ所 長二十間 柏木李右ヱ門  
一ヶ所 横十間  
一ヶ所 長五十間 伊佐ヱ門  
一ヶ所 横五十間 佐ヱ門

一、地藏堂一軒 長三間  
横二間 但しかやぶきニ御座候  
此堂四体被不申候本尊ハ石地藏

(一筆毎・個人名は畧)

田方合拾町四反三畝二十九歩

上田内わけ二町八反三畝七歩

中田四町五反七畝二十六歩

下田一町六反七畝二十八歩

下々田三反四畝二十八歩

以下畑(個人名・一筆毎は畧)

畑方合九町九反八畝二十五歩

上畑 二町七反四畝二十七歩

中畑 一町五反四畝十一歩

下畑 七反五畝十歩

下々畑 八反七畝五歩

屋敷 三百二十一歩

山畑 二町九反〇三歩

山荒畑 一町六反七畝八歩

以上

曾我岸村(書上げ)

往還道筋定(享保十二年)

十二天宮寛書(元文三年等を含む)

曾我岸村

小田原御礼辻迄貳里

一、当村従道法

永塚村へ拾壹町

東より西へ二町五十間

南より北へ五十間

一、百姓家統

村より東へ入巡之田畑谷津

村統申候

南は入巡の田地

北ハ山畑山沢道

一、百姓家数拾三軒

七軒本百姓

壹軒名主

壹軒山巡り

四軒柄在家

人数合百三人内男四十八人女五十五人

馬五疋

一、先高百六十六石四斗

一、今高七十二石三斗五升

此反別

一、田畑十六町四反四畝二十二歩

田十町八反二畝二十七歩

一、十二天宮 横一間 一社、社中内横十五間  
御神体ハ御へい<sup>一</sup>納社中ニ<sup>二</sup>松古木<sup>一</sup>  
本廻り九尺長様ハ間其外雜<sup>一</sup>御座候  
延宝元年丑ノ十月 曾我岸村  
名主 李右エ門  
組頭 市郎左エ門

覚

一、十二天宮巻社 横五尺一寸長さ七尺一寸  
戸前三尺二枚開き

内ニ空殿有横九寸高一尺七寸御長五寸七分之二  
繪像是ハ催筆と申儀も無御座候十二体有り

一、上屋拝殿共長三間三尺横二間一尺

一、宮建立之儀宝永二戌年村中<sup>一</sup>建立仕候右十二天宮之儀ハ意緒書付等無御座候付何年相立申候も相知レ不申候尤當村立神候節より之氏神と申伝<sup>一</sup>當村之氏神<sup>二</sup>御座候尤曾我六ヶ村と申候得共五ヶ村は曾我谷津村三社之氏子<sup>一</sup>御座候當村之儀ハ前二より十二天氏子<sup>一</sup>御座候ニ付節句祭礼共五ヶ村並ニハ無御座候依之村中抱く宮<sup>一</sup>御座候乃其書付差上申候 以上  
元文三年八月 曾我岸村

寺社御奉行様 名主組頭 印

右之通り地方御代官様ニも差上申候

一、十二天宮儀ハ前二より致支配九月廿八日節句<sup>一</sup>合津村尾崎藤島様願湯花ヲ<sup>一</sup>為御酒とにこり酒作村中江出シ候(以下省略)

宝曆三癸酉年正月 日

曾我岸村

柏木幾三郎記之

十二天宮につき、延宝元年曾我岸村(書上げ)には

「御神体は御へい<sup>一</sup>納社中ニ<sup>二</sup>とある。元文三年八月の「覚」書には「内に空殿有横九寸高一尺七寸御長五寸七分の繪像十二体有り」とある。その空殿の裏には、

元禄十二己卯年

奉造立十二天御尊跡當村中氏子繁昌守護

正月十二日 柏木李右衛門

とある。乙部李右衛門(柏木と同一人物)は乙部家の系圖に依ると此の年即ち「元禄十二卯十月十五日行年七拾

六才ニテ死去法名樹山宗鶴居士と号す」とある。その厨子型に作られた空殿の中には、前の扉を開けるとその正面から両側扉の裏側迄、次の様に描かれてる。

梵 天	地 天	(右前扉)
日 天	月 天	(右側面)
伊者耶天	毘沙門天	(正 面)
帝 釈 天	風 天	
火 天	水 天	(左側面)
焰摩天	羅殺天	(左前扉)

又曾我六ヶ村中五ヶ村は、曾我谷津村三社の氏子で、曾我岸村は他の五ヶ村に關係なく、独自に九月二十八日祭礼を行った事が分る。

二、今日に至る迄の概要

以上で村の位置規模等の概要は知る事が出来るが、曾我岸村は廢藩置縣に依り、明治四年七月十四日小田原県、同年十一月十四日足柄県、同九年四月十日神奈川県第二十一大区第三小区に入り(今日も尚旧三小区なる言葉がしばしば使はれる所以である)、下曾我戸長・副戸長役場を曾我原東光院に設置した。

同九年東光院役場に九思結なる小学校を設けた。同十一年七月郡区町村編成法に基き大小区を廢し、足柄下郡役所所管となった。二十二年市制町村制發布に依り下曾我村曾我岸となった。

大正十一年五月十五日当時の東海道線國府津〜松田間<sup>一</sup>に下曾我駅が開業し、同十二年九月一日関東大震災に依り、上府中村外四ヶ村(旧三小区)学校組合立の小学校は全校舎倒壊してしまつた。翌年懸案の東海道線を渡らざる地点の小学校を欲しいとの、同じ悩みを持つ田島村と協力して直ちに行動開始、同十四年一月十五日認可の指令に接するを得た。

大正十五年六月郡制廢止に依り、下曾我村は神奈川県

の直轄となり、昭和二十九年十二月一日、下曾我村を廢して小田原市へ合併、現在の小田原市曾我岸となったのである。

三、天津神社

曾我岸の氏神様は天津神社と申し、十二天神を祀るところから通称十二天さんと親しまれてる。創建は何時の時代か不明である。伝承に依ると、元は柏木家個人持ちだったが時代の変遷に依り村持となった。個人持ちでは段々負担が重くなる事、日本人の慣習として村の神社が欲しいと云う、これ等双方の意見が丁度合った処ではなかつたかと思われれる。

明治四十三年生れの筆者が子供の頃、道祖神の太鼓は天津神社の社殿に預けて置いた。その頃社殿の鍵は柏木家に預けて置いたがいつかなくなつてしまひ、関野隆司氏の土蔵前倉の鍵が丁度よく合うので、何時も借りて来て使つた事は今でも忘れない。

震災後新築した拝殿が昭和三十六年の台風で倒れてしまつた。自治会は直ちに臨時總會を開き協議の結果、今度は若い者にやつて貰おうという事になり、それには柏木温氏が昔の事もあつた云うので、復旧委員長、副委員長に關野政雄・石川政春氏が選出され、拝殿は旧に復した。

天津神社は何時の創建か全然分らない。が既述の「曾我岸村書き上」に見られる如く、延宝元年の記録に御へいの御神体が社中に納められてた事、廻り九尺、長さ八間もの古木が二本もあり「其の外雜木ニ而御座候」とある如くその創立は古いと考えられる。戦後迄現鳥居の上の道の丁度畦畔上部に、松の大木を切つた根が二株あつた事をよく覚えてる。

明治末年頃、曾我六ヶ村にあつた小祠は曾我谷津にある宗我神社に合祀され、「寄宮」と称された。旧来の各村にあつた神社は疎かにされた。天津神社もその例にもれず、明治末年から大正初期にかけて荒れてしまつた。大正末年荒れてた境内には社殿だけしかなく当時小学生は千代小学校へ通学してたので、永塚の方から何にも木のない処に一つある社殿は、まるで普通の民家にある稲荷さんの様に見えた。

震災前に建てられたのは、此の社殿を覆つてまるで



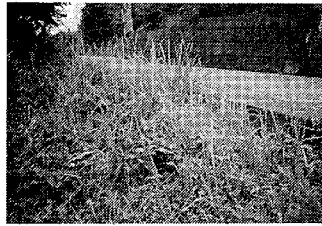
かん小屋かと思われる様な建物だった。震災後のは如何にも神社の拝殿の様に建てられた。左記の柏木文書の如く天津神社が今日の姿になる迄には、拝殿・神楽殿・鳥居等何回も建て替えられたものと思われる。

文政六年 曾我岸村  
十二天様鳥居割合帳  
癸未九月 日

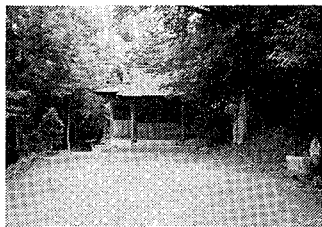
綿百目 内割  
同十五勿 人別割  
同拾勿 高割  
六貫百六十五勿  
一、綿 百勿付 五十六文  
一、〃 十勿 五文五分

文政六年  
十二天様鳥居建立帳  
癸未九月 日 惣氏子

一金売分二朱 木代  
一銀五勿 木椀一人  
一金壹分二朱 大工惣左衛門  
一、七十二文 杉板二枚 十人内三人奉納  
一、二十八文 縄 四房  
一、貳百文 紅がら代  
一、二百文 大工御祝儀  
一、百文 木椀 〃  
一、百文 〃 〃  
一、四十八文 半紙二文



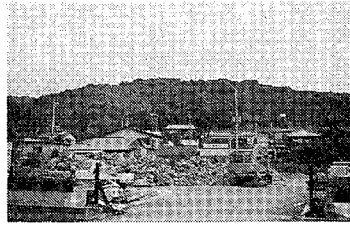
踏層の松の切株跡



天津神社



天津神社の森 (昭和30年頃の植林)



時代の遠望の森の塔下左鉄塔の曾我岸神社天津から松田県道津府集落越しに見えた天津神社の森 (曾我山中腹みかん小屋)

(以下略)

安政四丁巳年  
十二天様神楽殿建立扣帳  
正月吉日 世話人

木椀 手間  
九人 糸蔵  
三人 圓蔵  
大工 手間  
八人半 惣左エ門  
十二人 惣五郎  
十二人 別所政右エ門  
二人半 上曾我村文治郎  
六人 源蔵  
三人半 初蔵  
三人半 惣左エ門  
(以下略)  
神楽殿人足  
百二十一 二分五厘

天津神社は昭和初年、篤志家に依って献納された松杉等も戦争中に伐採されてしまった。戦後の祭礼には神輿や山車等が出て賑わい、只今では毎月一日に老人クラブで境内の清掃が行われている。戦後境内に植えられた木々も漸く成長して、如何にも神社の境内らしくなった。

四、十二天さん

十二天さんは、十二柱の天のつく神様だと分るが、一体その神様はどんな神様なのだろうか。佛教大辞典は大

要次の様に説いてる。

帝釈天、もとは古代インドラと云う最高の神様で阿須羅と戦闘を交えた事で知られる。佛教に取り入れられて須弥山山頂の喜見城を居所とし、釈迦を修業時代から助け、成道後も常に従う。十二天又は二十八部衆の一つ、一般に梵天と一対で如来様や菩薩様に随従する。多聞天、十二天又は十六善神の一つ、現世利益的な神として七福神中の毘沙門天とも呼ばれ、信仰を集めてる。梵天、バラモン教の最高神ブракマーを神化したもので佛教に取り入れられ、釈迦の帰依者として天神諸尊中最高位に置かれる。

月天、月の神で梵名を戦勝良といひ月曜・月天子とも云う。火天、火を象徴した神、インドではベータ三神の一つで、アグニと云い成立はきわめて古い。地天、地神・聖牟地神、万物を成育せしむる大地を人格化した女神、護法神として佛教に取り入れられ、十二天の一つとして天を守護する。

十二天、十二天とは本来インドの神話の神々であるが、密教に採り入れられて、方位を守護する神となり一組の神となったと云われる。散策コースの一角にある天津神社の案内板に、原稿用紙一枚以内でと云われたので次の様に記した。

天津神社

通称十二天さんと云われ、東方帝釈天・東南方火天・南方施摩天・西南方羅刹天・西方水天・西北方風天・北方毘沙門天・東北方伊舎那天、それに天地を守護する梵天・地天、更に日月星宿の守護神である日天・月天の十二天尊神を祭神とする。旧相州曾我岸村の平和と氏子の繁昌守護を祈念して造立された。その創立の時期は定かではないが、旧家に残る三百年前の古文書は「社殿・神楽殿・石燈籠等を覆って廻り三米高さ十五米もの松の古木二本、その他多数の巨木がうっ蒼としてた」事を伝えている。松の二株の根は戦争前迄この鳥居の上附近にあった。氏子の崇敬頗る篤く九月二十八日の祭典には、豪華な山車の運行、神輿の渡御等大変賑やかである。平和・繁昌守護の神様なので、想いのある場合折願すれば思いが遂げられると云われ、参詣者は多い。社地裏の十二天川は、四時水の絶える事がなく、多くの田畑を潤おして来た。

(続)

## 北村透谷と交友のあった 紅蓮洞・坂本易徳⑤

### その挫折の人生

岡部 忠夫

紅蓮洞・坂本易徳が慶応義塾の正科に入学したのは明治十九年(一八八六)のことである。

正科というのは、義塾が同二十三年に大学部新設の折、普通科に改称されており、大学予科、官学の旧制高校がこれに該当する。

坂本はのちに、その頃の義塾のことを、坂本紅蓮洞のペンネームで、「旧時の慶応義塾の作文」と題してちよっぴり触れている。

それによると、義塾は一時衰退した時期がある。明治十五、六年(一八八二、三)、徴兵令の改正があり、従来官立同様に与えられていた特典が剥奪された時が衰微のドン底であった。坂本は剥奪という言葉を使っている。官に対する、權威に対する、彼の反骨的な表現なのかも知れない。しかし、彼が入学した頃になると、義塾は、次第に

頭をもたげ出し、大学部が創設されてからは次第に隆盛に赴くようになった、とある。

慶応義塾の始まりは、安政五年(一八五八)、福澤諭吉が築地鉄砲洲の奥平家中屋敷内の長屋を借り蘭学塾を開いてからである。しかし、オランダ語が表地の用をなさないのを知り、英語に転向しようとするが得られず、独力で英語を学び、文久三年(一八六三)頃から塾生に英語を教授し始めた。

慶応四年(明治元年 一八六九)、芝新銭座に移り時の年号に因んで慶応義塾と名付けている。明治四年、現在義塾のある芝三田に移った。

義塾が、一時衰微に追い込まれたのは徴兵令の改正によるものではない。徴兵令の改正が衰退に追い打ちをかけたかも知れないに

ても――。

徴兵令が改正されたのは明治十六年(一八八三)十二月のこと、太政官布告により、官立・府県立学校の卒業生にのみ、一年志願兵、六年以内の徴収猶予の特典が与えられた。

だが、徴兵令改正前すでに義塾の維持は困難になっていた。

『福翁自伝』の「福澤諭吉年譜」には、明治十三年(一八八〇)「……遂に廃塾を決定したが、小幡篤次郎以下がこの打開に務め、十一月二十三日慶応義塾維持法案を発表、広く社中の協力を求める」とある。

ついでに小幡篤次郎のことを記すと、彼は義塾内では、福澤に次ぐナンバー2の地位にあったが、学生にとっては怖い存在であったらしい。坂本易徳は、入学した年に、ノルマントン号事件の学生芝居をやるうとして、小幡に指導を受けている。このことは後で触れたい。

ところで、慶応義塾が一時衰えた時期に、新政府による東京大学の創設や、官公私立の専門学校などの設

立が見られる。このことが義塾の衰退と結びついたとは思えないのだが……。

東京大学は、明治十年(一八七七)、東京開成学校(理法・文三学部)と東京医学校(医学部)が合併して、四学部より成る総合大学として発足した。その前身は、

幕府の開成所と医学所で、それを新政府が復興して、開成学校・医学校となり、大学南校・東校と改称、さらに東京大学となったものである。なお、東京大学には予備門(のちの一高)が併設されたが、学生と呼ぶのは正科生に限り、予備門生の場合は生徒と呼び、学生と生徒の身分を始めて使い分けている。

明治十九年になると、「帝国大学令」が制定され、東京大学は帝国大学と改称された。明治三十年(一八九三)京都に帝国大学が開校される迄は、大学といえば、この帝国大学一校に限られるほど、明治政府は厳格な迄も少数主義をとっている。

それだけに他校の生徒は、帝国大学に対しては、渴仰に近い特別の目で見ていたに違いない。

余談にはなるが、

坂本易徳と交友のあった生方敏郎は、早稲田が専門学校から大学になったときのことを、『明治大正見聞記』に次のように書いている。

明治三十四年に早稲田専門学校が大学になる、日本に初めて私立大学が出来るという噂が、大分学生間に刺激を与えた。……〔大学になったのは、三十五年九月二日、式典は十月十九日〕……

早稲田が大学になったお祝いのため、提灯行列ということをやった。これらが多分提灯行列というものの濫觴であったかと思う。五千余の学生がそれぞれ手に鬼灯提を掲げ、「都の西北」という歌を唱いじめつつ、校門を出て神楽坂を下り、牛込見附から入って九段坂を下り小川町を迂回して日比谷公園に入り、馬場先門へ戻って宮城前の広場で天皇陛下方歳を三唱して解散した。これが病みつきとなって、何かとと言うと提灯行列が催され、学生は引摺り出された。

生方は、この『明治大正見聞記』で坂本易徳のこともとあげている。このことは、いずれ触れたい。

ところで、早稲田が、慶応と共に他の私学に先駆けて、大学として認可されたのは、大正九年(一九二〇)、大学令が施行されての事である。それは後年、「大正デモクラシー」と呼ばれた時代の、その気運を示すものでもあろう。

再び話を明治の初めに戻すと、明治六年(一八七三)、専門学校制度が設けられ、「外国教師ニテ教授スル高尚ナル学校」と規定し、法・医・理・諸芸・農業・商業・獣医学学校などが含まれた。先に挙げた、合併して東京大学となる東京開成学校・東京医学学校は、この頃は、専門学校として格付けされていた訳である。

この明治六年には、外国語学校制度も設けられ、「外国語学ニ達スルヲ目的トスルモノニシテ専門学校ニ入ルモノ或ハ通弁等ヲ学ハント欲スルモノ」が「研究」する学校で、専門学校の予備階梯とされ、専門学校よりランクが一つ下であった。興味深いことに、

慶応義塾も、同志社(明治八年開校)も、初期は制度上外国語学校に属していた。外国語学校が専門学校となるのは、明治十年代のことで、「専門一科ノ學術ヲ授クル所」と規定され、法律・医学・語学・宗教などの学校が相次いで設立された。

因に前に挙げた早稲田大学の外、竜谷大学、専修大学、明治大学、法政大学、東京薬科大学、東京理科大学、駒沢大学、大谷大学、明治十年代に専門学校として発足したもので、法令上大学として認可されたのは大正九年以降のことである。

なお、教育制度に関連して記すと、明治十九年には十三年制定の「教育令」を廃止し、新たに「師範学校令」「中学校令」「小学校令」の各令が公布されている。この三つの法令は、第二次大戦後に教育改革が行われる迄の、約八十年間中等教育の基礎となっていたものである。

以上のような、教育制度の移り変りの積み重ねの中であって、「独り慶応義塾

は依然として猶旧時の漢字の塾に対する洋学の塾といふべき観があった」と、坂本易徳は、前掲「旧時の慶応義塾の作文」で述べながら、当時の義塾に於ての授業についても記している。

坂本易徳の義塾正科での授業体験は、後に彼が編集にたずさわる、『函東会報告誌』の内容に微妙に反映していると思われるふしがある。

『函東会報告誌』については、度々記しているように、明治の小田原を知る上で、片岡永左衛門が残した『明治小田原町誌』と共に欠くことの出来ない資料となっているが、坂本易徳と『函東会報告誌』との関連については、あとで記すことにする。

慶応義塾の日々の課程は講義、輪講、語学、数字で、それに翻訳と作文が隔週ごとに行われた。

講義というのは、英文で書かれた、政治なり経済の書物を教師がひとり講義して生徒に聞かせ、輪講というのは、生徒が教師の前で輪番に講釈するものであった。講義も輪講も、その書

物の文を解釈するだけで、深く掘り下げて研究するものでなかった。

いわば「今日諸学校で行われている英語科のようなもの」で、しかも発音などには頓着なくその書物の意味が充分に取ればよかった。しかし、世間では義塾の生徒はよく英書が読めるという許したもので、この「読める」というのが義塾元来の特色であったと、いう。

「今日諸学校で行われている……」とは、坂本がこの文を雑誌『文章世界』に書いた明治四十一年(一九〇六)頃のことであるが、平成の現在でもそのような傾向は残っている。いわゆる「眼で見える英語」で、日本独特の教育方法である、という人もいる。

のちに坂本は、中学校の教壇に立って、英語を教えることになるが、彼は、外人と英語を巧みに話すほどに会話の力はなかったと見るのが適当であろう。

語学は西洋人の担当で、読方・書取・文法・作文などであったが、その実、生徒間では余り重きを置かな

かった。なりよりも書物を読むのが主眼で、政治、経済は元より地理、理科や、さらに数学までも、イギリス人、アメリカ人が著したその国のものが教科書として利用された。そして教科書は貸与する制度であったため、その財政上からしてその多くは変更されることなく何年も使用された。

それ等の書物として、坂本は、バーレの萬国史、グイドリッチの英国史、チトルルの萬国史、ギゾーの文明史、ホーセットの経済書、スペンサーの干渉論、バジニーの憲法論、ミルの自由原理及び代議政体を挙げて

いる。一般には馴染みの極めて薄い古典的な書物が、継続して使用された訳である。

ところが、官学の方は、日進月歩の文明の学問をどしどし輸入して、その余波私学に及ぼんとする状況にあった。世がこのような状態であるに、「義塾は依然として例の義塾である」と、坂本は表現している。

(続)

郷土関係の刊行物 平成2年1月～6月  
小田原図書館並びに市内3書店調査

- ◇御家中祖先並親類書 I 小田原  
図書館編集発行 A5 430P  
¥3,500
- ◇小田原城とその城下 小田原市  
教育委員会編集発行 B5 263P  
¥2,000
- ◇荻窪用水の歴史 小田原市教  
育委員会編集発行 B5 60P  
¥2,300
- ◇二宮尊徳関係資料図鑑 神奈川  
県教育委員会編 榊報徳文庫発  
行 B4 265P ¥20,000
- ◇市史研究 あしがら 2号 南  
足柄市史編集室 A5 62P ¥500
- ◇開成町史研究 4号 A5 90P  
¥1,000
- ◇小田原地方史研究 17号 小田  
原地方史研究会 B5 64P ¥800
- ◇真鶴 29号 真鶴町郷土を知る  
会刊 B5 62P
- ◇庶民史録 23号 24号 西さが  
み庶民史録の会刊 A5 48P  
23号 ¥740 24号 ¥746
- ◇OXXI No.3 小田原るねっさ  
んす21通信刊 B5 67P ¥500
- ◇芦間乃道 36号 郷土文化研究  
会刊 A5 63P ¥700
- ◇北条早雲とその子孫 小和田哲  
男著 聖文社刊 B6 249P  
¥1,700
- ◇軍師・参謀 小和田哲男著 中  
央公論社刊 新書版 242P ¥620
- ◇湿生花園の花 勸箱根観光公社  
刊 B6 224P ¥1,500
- ◇さるのさぶとん 箱根山動物ノー  
ト 箱根叢書15 田代道弥著  
神奈川新聞社刊 新書版  
259P ¥950
- ◇かながわウエスト・リゾートラ  
イフ春夏秋冬(観光案内) 県  
西地域広域市町村圏協議会編  
夢工房刊 A5 48P ¥740
- ◇小説二宮金次郎 上下 竜門冬  
二著 学陽書房刊 A5 上313P  
下284P 上下各¥1,400
- ◇北条百歳 花の小田原 第1巻  
(小説)塩見鮮一郎著 批評社  
刊 B6 385P ¥2,800
- ◇回想の昭和文学 中河与一・安  
芸由夫著 古川書房刊  
B6 227P ¥2,060
- ◇演劇太平記(五) 北条秀司著  
毎日新聞社刊 B6 321P ¥1,800
- ◇エッセイ旅に果てたし 夢枕漢  
著 広済堂出版 B6 249P  
¥1,200
- ◇短編春秋Ⅲ 神奈川短編小説の  
会 ぼーろる社刊 B6 222P  
¥1,200
- ◇歌集第2集 紫陽花短歌会 A5  
40P
- ◇中島まき歌集 東海道五十三次  
歌行脚 木牙会 B6 156P
- ◇伊与田茂歌集 潮風 近代文学  
社刊 B6 100P ¥1,800
- ◇日本全国女流歌人叢書94 歌集  
白き蛾 赤石久子著 近代文芸  
社刊 B6 98P ¥1,800
- ◇詩集窓 永田東一郎著 教育企  
画出版刊 A5 91P ¥1,500
- ◇詩集時計 中河久仁子著 日本  
綜合出版刊 B6 77P ¥3,000
- ◇詩集あじさいの女 益田昌子著  
八小堂書店刊 A5 333P ¥2,000
- ◇漢詩集木屑集 高橋隆著 B5  
和綴じ 382P
- ◇句集真夜薄暑 石井美左於 東  
京四季出版刊 P ¥1,957

古墳遍歴 (一)

小田急線に沿って点在する古墳群 ①

飯田 悟郎

拙宅のドラ息子が、まだ  
白山中学校に通っていた頃  
のことですから、もう二十  
年程も昔になりましたか。  
或る時柄にもなく歴史に興  
味を持ちまして、級友と二  
人で、久野の丘陵に古墳の  
見学に参りました。それは  
よいのですが、帰ってから、

ていましたから、早速引き  
連れて諏訪原に赴き、そら  
あそこにもある、これもそ  
うだ、という具合に、僅か  
の間に二十幾つかを指摘し  
てやりました。標識のある  
一号古墳と四号古墳の二つ  
だけしか分からず、あとの  
ものは古墳だとは全然思わ  
なかったのだそうですが、  
拙宅の息子に限らず、大方  
の人は大抵そんなところで  
はないでしょうか。

のではありません。例えば、  
最も標準的な墳丘墓にしま  
しても、一般の人には、単  
なる小山か土砂の堆積にし  
か見えず、それが古墳だと  
言われても、そうか、フー  
ン、で終わってしまい、識  
者が血道をあげる前期・中  
期・後期・終末期の編年  
にしても、又は、ツタンカー  
メンの墓の中からジュエッ  
トの模様がでてきたに等し  
い常識外の新発見にしても、  
今度あの古墳から何か珍し  
いものが出てきたそうだ、

ぐらいですんでしまいます。  
しかし、会員の方の中には、  
古墳に對し関心をお持ち  
ちの方もおありかと存じま  
して、これから何回かに分  
けて、神奈川県内にありま  
す古墳およそ一千基余りの  
うち、比較的近在にありま  
すものの案内を書いてみよ  
うと存じます。先ず手始め  
に、小田急線にそって点在  
するものを幾つかあげて、  
その所在地・形状、さらに  
興味を持たれる方には、地  
図を添えて、現地に至る道  
順をも記載いたしました。

順序としては、小田原の  
久野諏訪原古墳群に始まり、  
続いて秦野市にはいつて、  
堀山下の桜土手古墳群、及  
び下大槻の二子山古墳と平  
塚市北金目の塚越古墳を中  
心とする古墳群。伊勢原市  
では三ノ宮及び山王台付近  
の古墳群と高森古墳群。厚  
木市では小野神社付近の古  
墳群、尼寺が原の古墳群と  
地頭山古墳、及川古墳群と  
三群に分かれた依知の古墳  
群。海老名市では瓢箪付近  
と秋葉山古墳群ぐらゐとな  
りましょうか。次回より順  
を追ってご案内させて戴き  
ましょう。

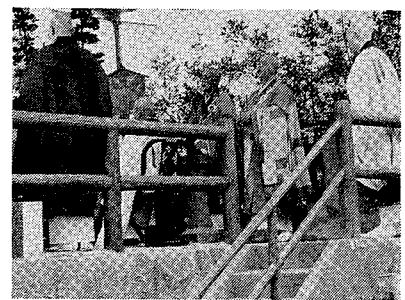
(以下 次号)

# 北条氏政・氏照公 四百年遠諱法要

## 北条氏遺蹟顕彰会が

豊臣秀吉の小田原攻めで自刃した北条氏政・氏照公四百年遠諱法要が、命日に当たる去る七月十一日午後三時より、小田原市栄町二丁目おしゃれ横丁の一角にある墓所で営まれた。

北条遺蹟顕彰会(会長込山和勇氏・本会特別賛助会員昇玉店主)の主催によるもので、法要は、今年で三十九回になるが本年は四百年忌に当たるため、会では、寄附金や市補助金により墓地を整備、その披露式典を兼ね



四百年遠諱法要



整備のなった墓所



挨拶の込山会長

政、弟の氏照が開戦の責任を問われ、城下の医者田村安齋(南町二丁目)邸で自害を命じられ、介錯は弟の氏規がとった。氏規は、その直後一門に殉じようとしたが検使の伊井直政におしとどめられた。ときに、氏政五十三歳、氏照四十九歳。

二人の遺骸は、北条氏の菩提寺伝心庵に葬られた。伝心庵は、江戸時代に寺町(中町一丁目)に移され、墓所は永久寺(城山三丁目)持ちになった。

わが身今消ゆとやいかに思う

豊臣秀吉、北条氏に対し宣戦布告。次いで東海道以西の諸侯に命じて水陸の主力を沼津・三島両城の間、江尻・清水両港の辺に動員終結させる。

十二月三十日(一五〇・二四)

北条氏、大筒・千挺を小田原・千津島・荻野等の鎗物師に急造させる。

天地の清き中より生れ来て  
もとのすみ家に帰るべきなり  
氏照の辞世

# 小田原合戦

## 開戦より落城まで

大略を記すと北條氏は、明応四年(一四九五)、伊勢新九郎長氏(北条早雲)の小田原城攻略より氏綱、氏康、氏政、氏直に伝えて五代九十五年にわたって城を拡張し、天正十八年(一五九〇)の小田原戦役に備えて、大外郭の構築がなされ、東は山王川、南は早川の河口に至る迄の間に土塁と空堀を巡らせ、周囲九

今ここに開戦より落城までの主な出来事を列記すると次の通りである。(カッコ内陽曆)

天正十七年十月廿九日  
(一五九〇・一〇・二六)

北条氏部将猪俣範直・真田氏属城の名胡桃奪取の報豊臣秀吉に届く。

豊臣秀吉、北条氏に対し宣戦布告。次いで東海道以西の諸侯に命じて水陸の主力を沼津・三島両城の間、江尻・清水両港の辺に動員終結させる。

十二月三十日(一五〇・二四)

北条氏、大筒・千挺を小田原・千津島・荻野等の鎗物師に急造させる。

天正十八年一月二日~一月七日(一五九〇・一・二~一・七)

北条氏、領内諸州の將兵の大部分を小田原城に集結し専ら籠城に決し、部署を定む 兵員約五

五代城主氏直は、徳川家康の女孀のため一命を助けられ、秀吉より五百人扶持を与えられ、高野山に追放された。この際、一門近臣三十人、士卒三百人がこれに従ったと伝えられている。

氏政の弟北条氏規、松田秀憲の二男秀治もその列にあった。氏直は、翌年、大坂に迎えられ扶持米三千俵を受け厚遇され、その上、来年伯耆(鳥取県の西部)に一万石を与えると、秀吉から口約されたが、痲瘡にかかり、十二月四日三十歳で没した。このため北条氏の宗家は断絶した。

北条氏規は、その人物を買われ、十九年八月、家康の斡旋により、秀吉より河内二千石が与えられ、ついで丹奈・河内二郡に六千九百八十石を受け、狭山藩北条氏の始祖となった。慶長四年(一六〇〇)没。

天正十八年、秀吉の来攻を受け落城はしたが、豊臣方の動員数は二十万余に及び、小田原城の攻囲に従った兵員のみだけでも水陸十五万、しかも、百余日

十一月廿四日(一五九〇・一・三三)

一月二十日(一五九〇・一・二〇)

北条氏、再度の戦術評定を行

一月二十一日(三・三五)

徳川家康、麾下の諸將に対し  
て小田原征討軍に参加を伝える

二月

家康、軍令を布達

二月七日(三・三三)

家康、先鋒を進発させる

二月十日(三・二五)

家康、駿府を発す 兵員約二  
万五千

三月二日(四・六)

秀吉、京都を発す

三月二十七日(五・一)

秀吉、沼津三枚橋に着陣

三月二十九日(五・三)

羽柴秀次、山中城を攻め陥し、  
城將松田康長、間宮康俊戦死

四月一日(五・四)

北条方、鷹巣城放棄

四月二日(五・五)

北条方、足柄、根府川の城放

棄

四月三日(五・六)

北条方太田氏房軍、諏訪ノ原  
より今井に旋回しようとする徳  
川軍を井細田口より夜襲するも  
反撃を受ける

四月四日(五・七)

豊臣方第一次攻囲線完結陸軍

十一万水軍二万四千 同夜豊臣  
方、第一回総攻撃 外郭を陥れ  
ようしたが北条方応戦盛んなる  
ために撃退される

四月六日(五・九)

秀吉、湯本早雲寺に在陣

四月七日(五・一〇)

豊臣方第二回総攻撃失敗

四月九日(五・一二)

豊臣方第二次総攻囲線完結

増援陸軍二万七千 徳川軍出  
お陥らす

五月

淀君石垣山に到着

五月五日(七・六)

和田三浦の城兵百五十人、陣  
營を焼いて遁走

五月九日(七・一〇)

伊達政宗奥州より来り秀吉に  
参調、帰伏を乞う

六月十四日(七・三三)

北条氏邦鉢形城開城

六月十六日(七・三七)

六月八日松田憲秀、豊臣方に  
内応を企てたが、次男秀治の訴  
により事発覚して獄に下る

丸篠曲輪攻撃 北條方山角軍の  
反撃を受け撃退される 秀吉石  
垣山築城開始

四月十三日(五・二六)

秀吉、持久策を講じ自らも淀  
殿の浅井氏を招じる。大名達に  
も妻妾を呼ばせる。

四月十四日(五・二七)

徳川軍篠曲輪攻撃 山角軍の  
反撃により撃退される

四月〇五月

北条方の城次々に落城

松井田城 四月二十日

江戸城 四月二十七日

川越城 五月一日

岩槻城 五月二十日

五月三日(六・四)

北条方太田軍、荻窪口より夜  
襲、蒲生、織田両軍これを退く

五月十八日(六・一九)

豊臣方第三回総攻撃 外郭な  
お陥らす

会員計報

堀内品夫氏(栄町二一

三十四)五月二十七日逝

去されました。享年七十八

歳。

勝俣 大氏(南町三十一

五)七月二十九日逝去され

ました。享年七十三歳。

川本忠幸氏(中里二六四)

七月三十一日逝去されまし

た。享年五十五歳。

西村隆二氏(本町四十九

二)八月二日逝去されまし

た。享年八十八歳。

ご冥福をお祈りします。

命を乞う

七月六日(八・三)

秀吉、小田原城受取に脇坂安

治、片桐直盛、家康の家臣榊原

康政等を遣わす

七月七・九日(八・六・八)

籠城の諸卒、退去

七月九日(八・八)

氏政、氏照、出城して医師田

村安齋の居宅に移る 小田原城

ここに落城

七月十日(八・九)

家康、小田原城に移る

七月十一日(八・一〇)

秀吉、氏政、氏照と重臣松田

憲秀、大導寺政繁に切腹をさせ

る

七月十二日(八・一一)

氏直、家康の女婿の故を以て

秀吉死を宥し、紀州高野山に追

放

七月十三日(八・一二)

秀吉、小田原城に入城、論功

行賞を行い、家康には北条氏旧

領内関八州二百五十万石の地を

与える (橋本阿掾)

小田原史談会諸行事

講演会 「小田原と福澤諭吉」  
平成二年四月八日(出)

講師 中央大学教授・小田原市  
史編纂専門委員 金原左門氏

聴講者次の通り。(敬称略)

相澤栄一、飯田悟郎、青木友吉

和田登、高田喜久三、徳永トキ

子、富田千春、広瀬康子、岡部

忠夫、小林房子、平岡幸雄、小

泉邦夫、石井艶子、沖山敏子、

石井敏三、曾我保夫、山口一夫

青木正太郎、佐野弥太郎、齋藤

清一郎、安藤繁美、岩本武、本

島安平、向山重忠、河本登志、

日野泰輔、吉池清、山岸忠三、

湯川玲子、木曾正雄、小田中正

二、吉崎ヨシ江、柏木正久、時

田満子、久保い寿、杉本包子、

瀧本みさ、山口わか、小西正一

堀越真一、内田公子、国見隆彦

(以上四十二名順不同)

久野古墳めぐり

平成二年五月十九日(出)

一時三〇分 講師 立木望隆氏。
総世寺にて立木氏の熱のこもった久野古墳発掘の頃の話あり。
折よく雨もあり、十五号古墳、四号古墳など現地での説明を聞く。最後に東泉院に立寄り、間中喜雄氏の「平和の碑」や中河与一氏揮毫の文学碑を拜見、岸達志住職より、寺の沿革など説明あり、寺の什物を拜観。

参加者は次の通り。(順不動)

- 吉池清、富田千春、笠間静子、岩本武、山室定尾、日野泰輔、本島安平、滝本みさ、久保い寿、向山重忠、曾我保夫、高田喜久三、岡部忠夫、吉崎ヨシ江、石井艶子、剣持芳枝、木曾正雄、シゲ子、小西マツ、久津間愛子、清水須江、小林房子、神保爲雄、安藤繁美・峯三、沖山敏子、和田登(以上二十七名敬称略)

網一色 方面史跡探訪

六月十五日(金)

一時三十分より。コース 網一色の千貫橋(城東高校前)、八幡神社・新田神社、二宮尊徳顕彰碑(尊徳が青年時代、酒匂川中洲で小田原城主大久保忠真より表彰を受けたのに因んで)、今井(現寿町五十一)の柳川栄氏宅、徳川家康陣跡、町田(現寿町三一五)、澤地利三郎氏宅にある酒井忠次陣跡、今井の本光寺。

千貫橋、八幡神社、新田神社などについては和登氏が説明。
ついで二宮尊徳顕彰碑については、建立者の田島亨氏(ヤオマサ御社長・本会特別賛助会員)が、お忙しいところを時間を繰り合せて、かけつけ解説された。旧家柳川栄氏宅では、『新編相模風土記稿』に載る「御陣場蹟古図」

や徳川家康から拜領の鎗(柄のみ)を拜見、ついで柳川氏が管理される家康が陣を張った跡を見学、柳川氏より示唆のある説明を受けた。本光寺本堂では住職から寺の沿革などを聞き、ついで高田会長より小田原合戦についての解説あり。

参加者次の通り(順不同)

- 杉山正喜、山岸忠三、山口一夫、川瀬速雄、柳川辰夫、吉崎ヨシ江、和田ヤス子、山口房江、湯川玲子、高橋ヨシ子、小林房江、本多康子、河部純子、石井敏三、和田登、富田千春、岡部忠夫、山室定尾、岩本武、岩田紀義、柏木ミツ、増山晶子、伊藤若恵、内田公子、吉池清、曾我保夫、高田喜久三、向山重忠、堀越真一、込山和勇、小田中正二、安藤峯三・繁美、氏名不詳一名(以上三十四名敬称略)

史蹟めぐり

今井網一色方面 和登仙

江戸時代千貫の費用をかけて作ったと云う城東高校前の橋近く

く川取締りの役所があった。
千貫橋古りし欄干日照りかな
片陰や欄干のみが残りけり

明治時代は国府津まで馬車鉄道でした。小田原城は御用邸でした。
宮様も馬車鉄道に夏帽子
慶應三年の小田原の大火で新田社は焼け、明治二十四年郷社八幡神社内に移った。
新田社の彫刻ゆかし木下闇

酒匂川は昔は冬の水の少ない時にだけ木の橋がかげられまし

- 梅雨に入る宝永の泥流すかに
酒匂川越えし蕪村や茄子の花
深梅雨や其角の心川渡る
本光寺の本堂は明治二十九年の台風で伊東まで流されました。
台風には伊東に流れ着く

四〇〇年前徳川家康の陣場は今井、酒井氏は町田、大久保氏は網一色でした。
青田風陣場の松を吹きぬける
骨埋まる酒井陣所や合飲の花
夏の月大久保陣所に生まれけり

一色今井 史跡探訪

川瀬速雄

於今井陣跡柳川邸 速雄吟

陣場探蹟曇濠巡
虚實陣營暗疑烟
供館攻城植拜領
両雄心緒興津津

陣場探蹟曇濠巡
虚實の陣營疑烟を暗し
館を供し城を攻城拜領す
両雄の心緒興津津

探蹟一深くかくれた事をさぐり求める

- 心緒一心情・思い
於酒匂川河畔頭碑前 速雄吟
慈民敏炯楽園公
希有聖人知徳翁
救世奇縁傳史話
碩人碑版爽川風

読み下し
慈民敏炯の楽園公
希有に聖人徳翁を知る
救世奇縁の史話を傳う
碩人の碑版に川風爽たり

川越史跡探訪

平成二年七月八日(日)七時

十五分発。コース 喜多院・川

越城主松平家墓所・東照宮・(昼食)・川越市立博物館・本丸御殿・川越夜戦跡(東明寺口)・菓子屋横丁・蔵造り資料館・時の鐘。十八時三十分歸着。説明は高田喜久三、富田千春、和田登、岡部忠夫の諸氏が当たった。喜多院については、春日局化粧の間や、家光誕生の間など、昨年NHK大河ドラマで、クローズアップされたが、富田氏の説明で喜多院に石彫の五百羅漢と沙羅の木があることが分った。五百羅漢はなかなか立派な出来であったが、ただし眼鏡をかけてたという一休は見出せなかった。五百羅漢の隣にある沙羅は珍しいもので、普通沙羅というのと、ヒメシャラあるいは夏椿を指すのが多いのに、ここは真正正銘の沙羅で、始めて見る人が多かったようである。なお、喜多院は戦国期出城が築かれた所だとも伝えられている。本年三月に完成した蔵造り風の川越市立博物館では、二班に分れ学芸員より三十分ほど説明を受けたのち三十分自由見学したが、新聞で絶賛するだけのことはあり、建物といた内部設備といい素晴らしい、小田原にもこのような施設があったらなあ、という声が多く聞かれた。参加者全員同じ思いであったようである。本丸御殿は江戸後期の嘉永元年(1848)に築造されたものだが、残るの

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店  
 小田原銀座 アオキ画廊  
 足柄香粧株式会社  
 飛鳥魚庫  
 紳士服のアメリカヤ  
 画材 ガクブチ れうえ  
 伊勢治書店  
 かまぼこ  
 株式会社 江島  
 株式会社 小田原魚市場  
 小田原ガス  
 小田原信用金庫  
 小田原報徳自動車  
 株式会社 オートセンター・スギヤマ  
 小田原中央青果株式会社  
 オリオン座  
 かまぼこ籠  
 令学苑  
 鐘紡株式会社小田原工場  
 力本ボウ化粧品鴨宮工場  
 かみやま小児科クリニック  
 興電社  
 小伊勢屋  
 正栄堂  
 中華料理 昇玉

鈴木廣木まぼこ  
 辰寿堂スポーツ  
 大営不動産  
 割烹 ぶる 海  
 二宮  
 茶半家具株式会社  
 ちんぎょう本店  
 角田ガクブチ店  
 東京電力(株)小田原営業所  
 株式会社 東華軒  
 トーホー建物齏店  
 八小堂書店  
 八ナマサ店  
 平井書  
 富士写真フィルム齏小田原工場  
 株式会社 報徳  
 松坂屋  
 学生専科 マルク  
 食器の店 マルサンストア  
 株式会社 美濃屋吉兵衛商店  
 みみづく幼稚園  
 ヤオマサ株式会社  
 山口菓子舗  
 湯浅電池株式会社 小田原工場

はその一部だといえ、関東地方に現存する唯一のものである。本丸御殿としてはほかに高知城にしか残っていない貴重な建築である。現在、内部は修理されて元通りに復しているが、明治以降は手織工場・学校、太平洋戦争中は兵器工場となり、戦後は武徳殿として利用された。家の老の控の間は、払下げられ川越の農家にあったものを再びここに移築したものだという。川越

夜戦については、元陸軍航空士官学校卒業の将校であった東明寺住職の説明を、特に用兵の面からの期待したが、どういう訳か遠慮され、代って和田氏が住職の執筆された「川越野戦」のパンフレットを代って読みあげた。蔵造り資料館では、時の鐘は、ここでないといふことで、丁度三時を知らせる時刻まで待つと、時の鐘は自動化されてい

て、人手なしで時を告げた。参加者次の通り(敬称略)  
 飯田悟郎、高田喜久三、和田登・ヤス子、相澤栄一、吉崎ヨシ江、富田千春、岡部忠夫、岩本武、田中千恵子、川合兼利・倅子、徳永トキ子、本多康子、関田トミ子、廣瀬康子、柏木ミツ、小平信之助、額田好男・ツネ子、小田中正二、飯沼恒雄、志澤健一・麗子、太田正太郎、太田幾喜、山口一夫、山口貢、

小西マツ、田中豊・光子、伊藤高子、中井道子、中島研一・マキ、安藤繁美、曾我保夫、劍持芳枝、木曾正雄・シゲ子、山口広子、向山重忠、渡辺昭子、高久雄子、田中ヒサ江、柳川辰夫、湯川玲子、中川れい子、内田キミ子、中村俊郎・ツヤ。(以上五十一名順不同)

史蹟めぐり  
 川越方面 和登仙

- ・東京に入れば小田原より川越の方が近い。
- ・東名の古墳のみどりすべり飛ぶ
- ・喜多院には春日局ゆかりの建物が江戸城から移築されていて、文化財が多い。
- ・家光の誕生の間や夏木立
- ・川越の江戸時代中期後期は松平氏でした。
- ・花真座や墓前に祈る白装束
- ・北条氏康は川越夜戦に勝って、関八州に覇をとえました。
- ・作務衣僧川越夜戦の夏語る
- ・川越の夜戦を誇る青田風
- ・草茂る堀に川舟今はなし
- ・川越には珍しい植物がありました。
- ・日陰濃し五百羅漢の沙羅双樹
- ・石佛を日傘のように沙羅双樹
- ・川越の蔵の街は立派でした。
- ・時の鐘梅雨の晴間を響きけり
- ・時の鐘自動で三つ夏を呼ぶ
- ・芋せんべい汗ふきながら蔵の街
- ・風鈴のやさしく鳴れり蔵の町
- ・風鈴と消し壺を賣る蔵の町
- ・黒塗りの蔵造りの街梅雨晴間

◎次号は来年一月発行予定です。